

聖徒の道

11 1974



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグラン・D・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアズ
ジョン・E・カー
ドイル・L・グリーン
ディーン・L・ラーセン
ダニエル・H・ラドロウ
ヴェール・F・スコット

統一機関誌国際編集局

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)

聖徒の道

日本語コーディネーター
八木沼 修一

聖徒の道11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

聖徒の道

1974 11月号

も く じ

大管長会メッセージ	481	スペンサー・W・キンボール
——全世界に出て行って——		
日々の恵み	484	ヒュー・B・ブラウン
——あなたは私たちの牧師様ですか——		
1974年地域総大会		
8月16, 17, 18日スウェーデンのストックホルムで開催さる… 487		
執事の役割	492	ボーン・J・フェザーストーン
教師の役割	494	H・バーク・ピーターソン
祭司の役割	496	ビクター・L・ブラウン
若い少女たちのために	498	アーデス・G・カップ
系図の木登り	500	エリザベス・L・ニコルス
大きな第一歩	501	メアリー・ジョイス・カップス
お友だちへ	504	
ふたつの塩の海	506	ナンシー・M・アームストロング
みつかりましたか	508	
質疑応答	509	ロバート・バックマン
予言者と主の民の予任	510	ブルース・R・マッコンキー
誠に然り「アーメン」	514	マーク・E・ピーターセン
正義と憐れみ	518	ジェームス・E・カリモア
永遠に続く結婚	521	ゴードン・B・ヒンクレー
召しに応じて	525	ニール・A・マックスウェル
ローカルニュース	526	

全世界に出て行って

——マルコ16:15——

大管長 スペンサー・W・キンボール

予言者ジョセフ・スミスへの啓示の中で主は次のように言われた。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国において、彼と共に汝らの喜びは如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15)

もしひとりの改宗者もいなければ、教会は衰退しやがて消え失せてしまうことは確かである。伝道を行なう最大の理由は、福音を聞きまた受け入れる機会を世の人々に与えることであろう。聖典は福音を宣べ伝えることについての命令とそれに伴う約束、召しとそれを果たしたときに受ける報いで満ち満ちている。私はこの「命令」という言葉を意識的に用いた。なぜならこの言葉は、いかなる人といえども逃れられない断定的な指令といった意味をはらんでいるように思えるからである。

私はあなたがたに尋ねたい。十二使徒を伴ってオリブ山の頂に登り次にあげる言葉を述べられた主は、一体何を意図しておられたのであろうか。「……エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」(使徒1:8)これは主が天のみ国に帰る前に語られた最後の言葉である。

「地のはてまで」とはどういう意味だろうか。そのときイエスは、使徒たちが知っていた地方はすでに踏破しておられた。これはユダヤの人々を指すのだろうか。それともサマリヤの人々であろうか。はたまた近東の人々のことだろうか。「地のはて」とはどこなのだろう。現在のアメリカの人々のことだろうか。ギリシャ、イタリアなど地中海沿岸の国々や中央ヨーロッパに住む多くの人々のことは含まれていたのだろうか。主は何を考慮しておられたのだろうか。それとも全世界に住むあらゆる人々、またその後何世紀にもわたってこの地上に来るよう定められた人すべてを指しているのだろうか。これまで私たちは、この主の言葉、またその意味するところを過小評価してきたのではないだろうか。福音を必要としている人が40億いる中で改宗者が10万という現状に、私たちは満足できるだろうか。

十字架にかかれた後、救い主はガリラヤの山に集まった11人の使徒たちに現われ、次のように言われた。「わたしは……いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行ってすべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:18-20)

1830年にパーレー・P・ブラット、オリバー・カウドリ、ピーター・ホイットマー、ザイバ・ピーターソンをレーマン

大管長会メッセージ

人のもとに派遣するにあたって主は、次のように言われた。「さらば、われ自らも共に行きて彼らの真中に在らん。われは父に彼らを擁護すれば、何ものも彼らに打ち勝つものなからん。」(教義と聖約32:3)主はこのとき、当時の世界のすべての民を指して言われたのだろうか。

またこのようにも言われた。「……見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:20)この言葉は、世の終りまでに設立される国家に属するすべての民を指すのだろうか。また彼らに進み行くように命じられたとき、主はこの業の成就に確信を抱いておられなかったのだろうか。いや、主は私たちを元気づけておられる。主は権威ある方で、こう言われた。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。……わたしは……いつもあなたがたと共にいるのである。」

マルコもまた復活後の出来事について記している。イエスは復活を信じない人をとがめられ、さらにこう言われた。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」(マルコ16:15)これは昇天の直前の言葉であった。主はエジプトやギリシャ、パレスチナのことを言われたのだろうか。紀元33年の世界のことだろうか、それとも1970年、1980年、1990年の世の中のことだろうか。この「全世界」という言葉はどこまでを含むのだろうか。また「すべての造られた者」とは一体何だろう。

ルカはこう記録している。「そして、その名によって罪の許しを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。」(ルカ24:47)同じ、主の最後の命令である。確かにこれらの言葉の中には重大な意味が隠されている。教えを必要としているのは全世界の人々であり、福音は全人類に行き渡らなければならないのである。

思い起こすに、モーセが見た世界は大きなものであった。「……モーセこの世と、この世の極と、創らるるすべての人の子らと嘗て創られしすべての人の子らとを見て……」(モーセ1:8)こうしてみると、主が当時人間の住む範囲を御存知であったとしか言いようがない。主は人がこの世に満ちることをすでに知っておられたのである。

主はモーセにさらに多くのものをお見せになった。モーセはそのみ言葉と栄光の偉大さに驚嘆するばかりであった。「その声いまだ耳にある中に、モーセその目を放ちてこの世を見たり。すなわちこの世にあるすべてのものを見たり。彼の見ざりしもの塵一つなかりき。彼はそれを神の『みたま』にて見極めたるなり。」

……その数はいと多くして実に浜の砂の数え切れぬ如く多かりき。

モーセまた多くの土地を見たり。その一つ一つは陸と呼ばれ、その陸の面にはそこに住む人々ありき。」(モーセ1:27-29)

またエノクも神が創られた数々の霊を見た。(モーセ6:36)これらの予言者は数限りない霊をはじめ、神が創造されたあらゆるものを見た。これらのことを考え合わせると、主

「全世界に出て行って……」

は「全世界」や「全地」，「地のはて」，「あらゆる国語の民」，「あらゆる国民」，「すべての人」，「多くの国々」という言葉を慎重に選んで使っておられることがわかる。

だからここれらの言葉は重要な意味を持つのである。

確かに主の羊は，イスラエルで主を取り巻いた数千の人や毎日接した人だけではない。全世界の民族のことである。これは全世界の人々に向けて与えられた命令なのである。

私たちは今，自分にできるすべてのことをしているだろうか。私たちは全世界に教えを宣傳伝えようとしているが，現状に満足してはいないだろうか。私たちは伝道を開始してからもう144年経つ。歩みを早めるための準備はできているだろうか。もっと大きなビジョンをもって進む備えができているだろうか。

神が私たちと目的を同じくされる方であることを思い起こそうではないか。神は命令者である。計画を立てられ命令を与えられたのは神である。今まで何度も何度も引用されたニーファイの言葉を思い出してみよう。「そこで私ニーファイは，私の父に『私は主が命じたもうことを行って行く。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前にある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである』と言った。」（I ニーファイ 3：7）私はこの聖句を読むたびに，まだ伝道を始めていない国々のことを思う。障害があることはわかっている。困難であることもわかっている。なぜならある程度努力はしてみたからである。確かに主はこの命令を与えられたとき，どのようにするかを知っておられた。だから私たちはニーファイのように言うことができる。「私が一心に志すところは，すべての人がアブラハムの神，イサクの神，ヤコブの神のところへ来て救われることを，かれらに説いて信じさせることである。」（I ニーファイ 6：4）

私は教会歴史を読むたびに，当時伝道のために世に出て行った兄弟たちの大胆な行動に驚きの目を見張る。彼らは道を見いだしていたのではないだろうか。迫害と苦難の中にあっても彼らは進み行き，明らかにたわみかかった，また閉ざされたままになっていた戸を押し開いていったのだった。この恐れを知らない人々は，まだ教会が完全に組織される以前に，教会本部にほど近いインディアンの居留地で福音を教えた。また1837年，イギリスでサタンと戦った十二使徒たちは，続いて1844年にはタヒチ，1851年にオーストラリア，1853年はアイスランド，イタリアは1850年，そして同じ1850年にはスイス，ドイツ，トンガ，トルコ，メキシコ，日本，チェコスロバキア，中国，サモア，ニュージーランド，南アメリカ，フランス，ハワイと，その業を押し広めて行ったのである。しかしこの発展の様子を見ていぶかしく思うのは，伝道が進んでいるのは数カ国で，その近隣の多くの国では全く発展を見ていないということである。しかもこの初期の伝道の多くは，指導者たちがロッキー山脈を越え，作物を育て，家を建築している際中に行なわれたものであった。信仰，まさに超人的な信仰である。

さてここで話をもう少し発展させよう。これは必要なことであり，かつ可能なことだと思う。主の言葉をもう一度引用してみよう。「わたしは，天においても地においても，いっさいの権威を授けられた。」（マタイ 28：18）

主はトーマス・B・マーシュ，ジョセフ，シドニー，そしてハイラムに「王国の鍵」を「保ち」，「王国の門を開く」ように言われた。（教義と聖約 112：16，17）

そしてこの勇敢な指導者たちに下った命はこうである。「…されば，如何なる所にも汝わが名を宣ぶる所には，人々のわが言を受け入れんため汝に有効なる門戸開かるべし。」（教義と聖約 112：19）

兄弟たち，私は，とにかく私たちの能力でできる限りのことを行なったならば，主は門戸を開く方法を示して下さると思う。これは私の信仰である。

しかし私たちに入る準備ができていないのに主が門を開けて下さるとは思えない。

私はこの門戸を開くために使徒たちを助ける人が出て来ると思う。有能で信頼のおける政治家が。しかしそれは，私たちの準備が整ったときである。

今日私たちの教会には1万7,500名の宣教師がいる。この数は増やせる。はるかに多く。1973年には8,900名が伝道本部を出て行った。

確かにジョン・テイラーがこう語っていたと思う。「私たちが義務を果していたならば救い得たと思われる人々に関して，主は私たちにその責任を問われるであろう。」

私が求める宣教師は二流の宣教師ではない。また精神的に欠陥のある宣教師でもなければ，証のない宣教師でもない。ましてや不道德な宣教師であるはずがない。私たちが願うのは，全世界のあらゆるワード部，支部で，優秀な宣教師を出すための訓練をもっと若いときから始めていただきたいということである。もうひとつのチャレンジは，若人に伝道に出ることが偉大な特権であり，そのためには肉体的にも精神的にも霊的にも健全でなければならず，また「主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり」ということを理解させることである。（教義と聖約 1：31）

また家庭や教会の組織でよく訓練を受け，十分に教義を理解し，燃えるような熱意を抱いて伝道に出てもらいたい。面接もさらに十分にしていきたい。細部にわたり，相手の気持をよく考えた，理解あふれる面接をしてほしい。しかし何にも増してお願いしたいのは，宣教師になろうとする人々をもっと若いときから，長い時間，十分に訓練していただきたいということである。そうすれば彼らは残らず，大きな喜びをもって召される日を待ち望むようになるであろう。

別に私がどうこうしたということではないが，私が十二使徒評議員会の一員に加わった1943年の会員数が100万足らずだったのに比べ，現在その数は335万3,000名にものぼっている。当時ステーク部数が146，伝道部数が40であったのが，今ではそれぞれ663，107となっている。1943年の93万7,000名から1953年は111万6,000名，そして1973年には330万名

に達したのである。これは1943年から1959年までの伸びが約19パーセントであるのに比べ、1959年から1974年までの伸びが196パーセントであることを表わしている。これは驚くべき発展である。

次のことは皆さんも興味を持たれるのではないだろうか。すなわち先週現在（3月30日）で宣教師数は1万7,564名であるが、その中で英語で福音を教えている人は9,560名で全体の約55パーセントを占めており、合衆国、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピンで伝道している。残りの約8,000名は言語訓練センターで言葉を学ぶ。この45パーセントの人々は3つの訓練校で訓練を受けているが、17パーセントにあたる3,000名がスペイン語、1,000名がドイツ語、同じく1,000名が日本語、400名がフランス語、600名がポルトガル語、その他デンマーク語、フィンランド語、オランダ語、ノルウェー語、スウェーデン語、中国語、イタリア語、朝鮮語、タイ語、サモア語、アフリカ語、ナバホ語などがあげられる。

ここである統計家の興味ある話を紹介しよう。それによると紀元33年、救い主が「あらゆる民族、血族、国語、国民」と言われたとき、地球上にいた人々の数は、約2.5億人であったろうということである。

ところがそれから1,800年後、ジョセフ・スミスが世に伝道を始めるように命じられたときの人口は、彼の調査によれば約10億人、キリストの時代の約4倍であった。そして、全世界に福音を宣べ伝えよという命令を再確認した現在、その数は約35億人となっている。

若い人は皆伝道に出るべきですか、という質問をよく耳にする。主はそれに答えておられる。「然り」若人はすべて伝道に出るべきである。主は言われた。「わが教会の長老たちを遙かに離れたる諸々の国民に遣わして……万国の民を訪わしめ、まず異邦人を訪い次にユダヤ人に至らしめよ。」（教義と聖約 133：8）主は制限は設けられなかった。

私たちは確かに全員が伝道に出るべきであるが、必ずしもすべての人が海外に出て福音を宣べ伝える備えができていないわけではないということを知っている。宣教師として召される年齢に達していながらまだ準備のできていない若者の数は非常に多い。もちろん彼らを伝道に出すべきではない。まず準備をさせる必要がある。肉体的に不適格な人は少ない。それよりはるかに多いのは、情緒的、精神的、道徳的にふさわしくない人である。彼らは清い生活、伝道の精神に調和した生活を送っていないためである。彼らは備えておかなければならなかったのだ。これは必須のことである。しかし律法を犯したからには彼らは除かなければならない。ここに私たちに対する最大のチャレンジがある。つまり若い青年たちがふさわしくあるように見守ることである。そう、能力がありふさわしい者は、すべてその肩に十字架を背負わなければならない。キリストについて、またキリストが十字架にかけられたことについて教える軍勢を必要としているのである。確かに彼らは備えなければならない。儉約をし、いつも喜んで働

くという気持を持って。

主は言われた。「また、人ごとごとくその手に正義を取り腰に忠言を纏いて、世に住める人々に警め声を挙げ、言葉と逃げ走ることと両つながらによりて悪人の上に荒廃のおそい来るを宣べんことを欲す。」（教義と聖約63：37）主が「人ごとごとく」と言われたことに注目していただきたい。私たちがいなければならないのは、「人ごとごとく」に備えをさせる方法を見いだすことである。

1年前私は日本と韓国を訪問し、立派な若者が数多く教会に加わって組織の指導者として奉仕している姿を目のあたりにした。そのとき私は、かの国々の何千人もの人々が備えをし、他国へ伝道に出ることを強く望んでいる姿を心に思い浮かべることができた。またメキシコを訪問したときにも、メキシコの若者をはじめ中央および南アメリカに住むラテン系の人々が、資格を得て、自国は言うに及ばず他の国々にまでも伝道に出、そして遂には主の宣教師による軍勢が、あたかも水が大海をおおっているようにこの地球全体に満ち満ちる日を心に浮かべることができた。

私はどこの国を訪問しても、そこで指導者として働いているそう明で立派な人々を数多く目にする。そして数え切れないほどの人々が福音を実践してそこから恵みを得ているのである。

教会が組織されている地域から送り出される宣教師の数が増加して可能性の極限に近づくとき、すなわち教会の資格ある少年がすべて伝道に出るとき、それは海外のステーク部や伝道部がひとつ残らず、自国で働くに十分な数の宣教師を自らの力で出し、今伝道しているアメリカやカナダの青年たちに代わるときである。また新しい地域で伝道を開始するにあたり、使徒を助けるためにふさわしい人が働くときでもある。さらに通信衛星やそれに類する発見もかなりの程度まで進み、あらゆるメディア——新聞、雑誌、テレビ、ラジオ——が最もその力を発揮するときである。また私たちはおびただしい数のステーク部を組織し、これがさらに大きな飛躍への土台となるであろう。さらに今まだ神権を受けていない若人、また伝道に出ていない、結婚していない大勢の若人を不活発な状態から引き上げるときである。このような状態が訪れた暁には、いや訪れるまでには、私たちは主が言われた「すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」という主の命に近づくことであろう。

私は、キリストの福音に対して門戸を開く国には、すべて主の祝福が臨むことを確信している。その祝福は天にあげられたエノクの市のように、教育に、文化に、そして信仰や愛に流れ込んでいくであろう。そしてあたかもニーファイ人の200年間、の平和な日々の如くになるに違いない。国は繁栄し人々には安らぎと満足がもたらされ、喜びと平安はあらゆる人々に与えられるであろう。そして福音の教えを全力を尽くして実践する人は永遠の生命を受けるのである。

この偉大な責任に向かって進む私たちに主の祝福があるよう。主イエス・キリストのみ名により、アーメン。

日々の恵み

末日聖徒一人一人の胸には、福音に従い、主を愛することによって得た日々の経験が刻まれているものです。これはだれもが持っている物語です。証を強くした経験、祈りが答えられたこと、愛する家族や友人の受けた靈感、神権者の行ないから学んだこと、補助組織についての経験を他の教会員と分かち合いましょう……。下記の宛て先に原稿をお寄せ下さい。〒016 東京都港区南麻布5-10-25 中正堂会館 末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部 八木沼修一

あなたは私たちの牧師様ですか

十二使徒評議員会会員ヒュー・B・ブラウン長老の伝道経験

1904年、21歳のときに私は英国へ伝道に召され、母親が最寄りの鉄道の駅まで私を見送ってくれた。汽車が出発する直前になって、母はこう言った。「ヒュー、まだ小さいときによく夢を見てうなされたことを覚えている？あなたは目をさまして隣の部屋の母さんと呼んだでしょ。『お母さん、お母さん』って。そして母さんが『はあい、なにあに、母さんはいますよ』と言うと、あなたはすっかり安心して、寝返りを打つとまた眠ったものよ。」

それから母はこう言った。「いつもそうだったわ。そうして眠ると、あとはすやすやと朝まで。これからあなたは遠く離れた所に行ってしまうて、母さんと呼びたくともそれができなくなってしまうのよ。大変なことがあるでしょう。目をあいている昼間に悪夢を見ることだってあるでしょう。苦労や問題に悩むこともあるでしょう。」

でも知ってほしいの。母さんがあなたの話を聞けなくなっても、聞いて下

さる方があるのよ。あの小さかったときのような信仰を持って、『お父様、いらっしゃいますか』と呼んだら、ヒュー、必ずよ、お父様は答えて下さるわ。声は聞えないかもしれない、姿は見えないかもしれない。でも、必ずあなたに答えて下さるわ。お父様がそこにいらっしゃってあなたのことを心配していて下さることを知って、きっと慰めを得ることでしょう。これはたとえだけれど、どんな状態の中でも、あなたは寝返りを打ってすやすやと眠れるでしょう。」

宣教師の任命を受けにソルトレーク・シティーへ着いたとき、私は実にひどい風体だった。馬に長く乗りすぎたためわに足になり、日焼けのために顔はしみだらけで、髪は真白だった。私はこれほどさえない宣教師もいないだろうと思った。

それから6週間して英国伝道部に着くと、私はノーリッジへ送られた。そこに到着すると地方部長がこう言った。

「ブラウン長老、ケンブリッジへ行って下さい。ダウンス長老が一緒です。彼は45歳ですが、ケンブリッジ到着の翌日にパリへ向かう許可が取ってあるので、その後はあなたひとりきりになるはずです。」そしてさらに、「ブラウン長老、知っていた方がよいと思うのですが、ケンブリッジの最後の宣教師たちは銃で追い払われ、今度町に足を踏み入れる宣教師は、すぐさま射殺だと言われたそうです。ブラウン長老、その今度行く宣教師というのがあなたなのです。」

私たちがケンブリッジに向かうと、モルモンがまたやって来るという知らせが伝わっていたため、町中に反モルモンのなぐり書きが氾濫していた。あるものは面白おかしく、またあるものは痛烈に。

私たちは泊まる場所を見つけ、ダウンス長老がちらしを用意し、私の名前と住所を書き入れてくれた。彼から、どこでちらし配りを始めたらよいかを

教えてもらい翌、朝彼が出発してから、ちらしを配り始めた。午前中いっぱい配ったが、好意的な人にはひとりも出会うず、福音の話もできないままだった。

扉が開いても十中八、九は目の前でまたボタンと閉められた。昼になり、私たちはいくらか気落ちして帰宅した。午後再び出かけて行ったが、同じことの繰り返しだった。その翌日は土曜日で、3日働いて一度位は話の機会をつかまなければならないながら、朝のうちに外へ出かけた。しかしまた同じだった。そこで私は主が間違いをされたに違いないと思った。

私は「父よ、いらっしゃいますか」と聞いた。すると御父は「ここにいる」

と答えられた。しかし寝返りを打って眠れとは言われなかった。土曜日は昼までちらし配りをして帰宅した。私は、自分をここへ遣わすこと以外にもっと良いことを主は御存知のはずだと思った。ふがいなく、心細く、みじめな思いだった。200キロ 四方にはほかにモルモンはだれひとりいないのだ。

小さな暖炉のわきに腰かけて暖をとりながら、自分をここへ遣わされた主の不手際をあれこれ考えていると、玄関にノックの音がした。

宿の女主人が応対に出ると、男の声が聞こえてきた。「こちらにブラウン長老はおいでですか。」やれやれ、私もこれまでだと思っていたと、女主人が言った。

「ええ、おいでですよ。居間にね。さあ、どうぞ。」

男は入ってきた。手にちらしを握っていた。彼は私を疑ぐるような顔つきで見て、「あなたがブラウン長老ですか」と言った。否定すべくもない。すると彼は言った。「あなたがこの紙をうちの玄関のドアにはさんで行かれたんですか。」

「はい、そうです」と私は言った。

「ブラウン長老、実は先週の日曜日、17家族が英国国教会を離脱しました。みんな大家族で、わたしのうちには、大広間があって広いので、みんながうちに集まりました。それまではみんな英国国教会の信者だった者たちです。一緒に祈って、新しい牧師様が来られるように今週ずっと祈ろうと話合っただんです。」

それから彼は言った。「今晚、てっきり主は祈りを聞いて下さらなかったものと思ってうちに帰ったんです。元気もなく玄関の戸を開けると、この紙が床に落ちているのを見つけました。読んでいるうちに、主が私たちの祈りに答えて下さったのだとわかりました。それで今こうしてお願いに来たんです。あすおいで下さって、私たちの牧師様になって下さい。」

伝道地に着いて3日も経っていなかった。そこで集会を開いたこともないし、集会に出たこともなかった。自分ほどあわれな者もないと思っていたのに、その男は「私たちの牧師様になって下さい」と言うのだ。

私は牧師がどういう人か知らなかったが、こんな時に長老だったらこうするだろうというふうなことをした。ぐっとあごを引き、胸を張って、そして



「お願いに来たんです。

あすおいで下さって、

私たちの牧師様に

なって下さい。」

言った。「はい、まいります。」

彼は私に礼を述べて立ち去ったが、あとに残った私は食欲が失せてしまったような気がした。それで女主人を呼んで、夕食はいらないと告げると、部屋に上がって寝る仕度をした。私はベッドの傍らにひざまずき、生まれて初めて本当に神と話をした。祈ることを教えられ、常に祈ってはいたが、その晩はベッドの傍らにひざまずいて主と本当に話をしたのだ。私は主に自分の状態を語り、あの人たちが真理を求めて英国国教会を離れたこと、彼らは真理を求めていること、私には真理を伝える用意がないことを話した。そしてどうかその責任を自分から解いて下さいと願った。主はそれに答えられないようだった。私は立ち上がるとベッドに入ったがなかなか寝つけず、また起きてひと晩中祈りを続けた。

翌朝、階下に下りて女主人に朝食はいらないと言い、ケンブリッジ大学の構内へ散歩に出かけた。その朝はずっと散歩を続けたが、幸せそうな若者たちを見て、昔丘で牛番をしながら、牛がのんびりと横になってはんすうする姿を見てはうらやましいと思ったあれと同じ気持を感じた。心は落ち着かず、楽しそうな学生たちを見るとますます心が騒いだ。昼になって帰宅し、女主人に昼食はいらないと告げると、また散歩に出て、その日の午後はずっと歩き通した。空には一片の雲が浮んでいて、あの雲が大きくなって嵐になり、だれも集会に来なくなるようにと主に祈った。だが、その祈りは答えられなかった。

その晩、私は暖炉の傍らにすわって物思いにふけり、助けを祈り求めた。つ

いに7時15分前になり、私は身を起こして丈長のダブルのコートををはおり、手には初めてキッドの手袋をはめた。そして買うとよいと教えられていたがそれまで一度も使ったことのなかったステッキを手に取り、これも初めての山高帽をかぶって、足取り重くその家に向かった。前夜顔を合わせた男が私を見つけて迎えに出、深くおじぎをして丁重に「どうぞ、お入り下さい。牧師様」と言った。私はそれに度胆を抜かれた。

中に入ると大広間にいっぱいの人で、彼らは新しい牧師に敬意を表して起立した。私はそれにも肝をつぶした。ようやくそのときになって、事の成行きを実感として受け取ったのだった。

自分ひとりで説教から祈りから、果ては歌まで、一部始終を取りしきるはめになるとは、ことここに至るまで考えてもみなかった。私は、『『高きに栄えて』を歌いましょう』と言った。人々の目は、歌はそっちのけでじっと私に注がれていたが、私は歌った。ひどい独唱だった。それが終わると会衆を見渡し、靴の中では足先をおるおる震わせながら、こう言った。「皆様、私が祈る間、向こう側を向いて椅子の傍らにひざまずいて下さいませんか。」

そうすれば彼らの視線から逃れられると思ったのだ。

彼らはひざまずき、私は祈った。そして生涯でそれが2度目の、神との話であった。私は重大問題について人が1対1で話し合うように、神と話をした。もう一度状況を説明し、会衆が真理を聞こうとして集まっていることを話した。こう言ったのを覚えている。

「おお神よ。今晚彼らに真理をお教え

下さいますように。もし私がその器となれるなら、すべてはよしです。しかし、おお神よ、どうぞみ力を。」祈り始めたとなん、恐れと不安がすべて消え、何が起こるかを2度と心配はしなかった。

祈り終えて立ち上がると、大半の人は目頭をぬぐっていた。私は2曲目の讃美歌を歌ってから、話を始めた。45分話をした。神は私を通じて、自分でも聞いたことのないような、会衆もこれまで聞いたためしのない説教をされた。集会が終わると人々は私のまわりに群らがり、私の手を握って口づけをした。

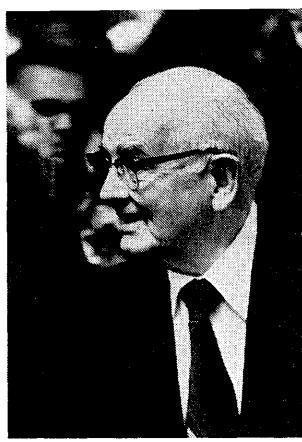
会に来るときには重い足をひきずって来たと言ったが、今にして思えば、帰宅途中は地面を踏みしめたのはたった一度といった感じだった。神が祈りを聞いて下さったことに、私は有頂天だった。

それから3ヶ月のうちに、あの広間にいた男女子供の全員が教会員になった。そして彼らはアイダホやユタやアメリカの各地に移住した。息子や孫を今度は逆に伝道に送り、あの集会の結果、ソルトレーク・シティで先日あのときの古老が話してくれたところによれば、「伝道に出て福音を伝えた者たちを通じて、あの1回の集会から1万人以上の人に影響があった」という。

私は神が生きておられることを知っているだろうか。確かに、この人生のほかの何よりもよく知っている。神が自分の友であること、神がおられて、呼ぶときには聞いて下さることを知っている。それを知った私には恐れるものはない。

1974年

地域総大会



8月16, 17, 18日, スウェーデンの ストックホルムで開催さる。

デンマーク、フィンランド、ノルウェー、そしてスウェーデンの国々は、もはや決して過去に帰ることはない。8月16, 17, 18の3日間にわたって開催された教会地域総大会。北欧の国々から相集い、主に油注がれた僕のかたわらに座した聖徒たちは、身も心も力と勇気が満たされながら帰路についたのであった。彼らがこの大会で学んだことを実践するならば北欧の国々における主のみ業はとどまるところを知らず発展していくに違いない。

大会の終りにある会員はこう言った。「自分自身について、

また私たちの将来について新しいアイデアや目標が得られましたし、新たなビジョンがわいてきました。」

こう言う人もいた。「この瞬間から、私たちはもっと多くのことを要求されるでしょう。何よりも増して、従順ということを教えられました。」

ある若人はこう語る。「何かを変えていかなければならないということがわかりました。私たち若人の多くは、音楽や服装などの標準をもっと変えなければならないと思います。」

このような態度、新しい見方、そして決意といったものは

実は地域総大会がストックホルムで開かれることが発表されたときからもうすでに聖徒たちの間に見られたのである。霊的、物質的な準備が始まったのはそのときであった。大会前の状況について、デンマーク伝道部長グラント・R・イスベン是这样語る。「今こそ準備のときだと決意を固めた人は多かったと思います。その中でも最大の準備は霊的な準備でした。『予言者のメッセージを受けられるように霊的に備えたいと思う』という言葉は私は何度となく耳にしました。」

大会前の神殿訪問者数が増加したことは、そのことを如実に物語る。今までは各伝道部が夏に数回セッションを持つのが普通だった。しかし今年は、大会参加のための費用を相当な額にのぼるにもかかわらず、大会前数カ月の神殿訪問者数は増加を見たのである。事実ある地区ではほぼ2倍を数えた。

こうした霊的な準備は、みたまあふれる大会となって実を結んだのであった。キンボール大管長は五度説教壇に立ち、すべての戒めを守ってそれぞれの国に教会を確立するよう聖徒たちを励ました。特に6月に新たに組織されたデンマークステーク部の聖徒たちにとって、キンボール大管長の「行って隣りに福音を宣べ伝え、北欧諸国にさらに多くのステーク部が誕生するよう、教会の確立に力を尽くそう」というチャレンジには、強く心を打たれるものがあったに違いない。

ステーク部建設というテーマは、日曜日の朝の神権指導者集会で特に強調された。実に印象に残る集会であった。キンボール大管長是这样語った。「あなたがたは教会を強くすることができます。ステーク部、それもたくさんのステーク部を組織することができます。神殿をいただくべきではないという理由はどこにもないでしょう。神殿を建設したいと

思いますか。儀式を行ないたいですか。神殿建設は可能です。それぞれの国にひとつずつでも建てることができます。ただしこれはすべて、私たちが伝道して人々を改宗に導くことによって初めて可能になることなのです。伝道部しか組織されていないところに神殿を建設することはあまり例がありません。ですからステーク部が必要なのです。」

予言者の口からこのような力強いメッセージがほとばしり出た裏には聖徒たちの備えがあった。多くの人々は長い距離をものともせず、大会に集ったのであった。休暇を取り残業やアルバイトをし、また儉約をして……。

大会実行委員会は聖徒たちがこのすばらしい経験に十分に浴することができるよう長時間の努力を重ねた。この委員会では、会場の借用からアッシャーのバッジに至るまで、すべての決定や調整を行なわなければならない。そこでカイアージ・ヨハンソン兄弟というすばらしい指導者のもとに小委員会が設けられ、それぞれの施設および備品、歓迎、情報、印刷物発行、交通、宿泊、契約、食物、救護、音楽、文化活動を担当した。

この小委員会の中には途方もないような責任を受け持ったところがいくつかある。たとえば宿泊委員会の目標は「大会参加者がひとり残らず、宿泊場所とそこに着く方法を知っている」というものであった。参加予定者は5千人ということを考えればこれは決してなまやさしい仕事ではない。ましてや変更やキャンセル、申し込みの遅れなどを考慮すると、まさに膨大な仕事と言えよう。

こうした委員会は、裏方として人目に触れずに黙々と活動していた。しかし大会を成功に導くには、やはりすべての人



大会に集まった人々



コーラス隊

の努力が結集されねばならなかったのである。

その努力がはなやかな姿となって人々の目に映った委員会もあった。それは金曜の夜の文化活動を準備した委員会である。この会では、カラフルな民族衣装を身につけた各国の400人余りの人々が、歌い奏で、そして踊った。大会の開幕を飾るにふさわしい、実に楽しい感動的な夕べであった。

まず84人のメンバーが参加4カ国の国旗を手にして入場、次いで各国の国歌を歌い、その後で各国の文化や歴史が歌や踊り、演奏を通じて紹介された。まさに壮観であった。だがこれにかけた聖徒たちの準備の一端を知れば驚かぬ人はいない。

この祭典の練習は各国の支部や地方部ごとにせざるを得なかった。しかし大会の場でひとつに合したとき、それは見事に花開いたのである。まさに奇跡だった。

ある演奏グループは、伝道部の各所から選ばれたメンバーで編成されていた。プロなみの人もいれば始めて数年しか経っていない人もいた。楽譜を見なければ演奏できない人もいれば耳で聞いただけでできる人もいた。そこで彼らはプロの音楽家を見つけて、プロらしい音が出せるように編曲してもらった。(もちろんこの音楽家は1銭も受け取らなかった。) またこのグループにはビオラ奏者がいなかった。そこで彼らはある才能のある青年を選び、地元の交響楽団のビオラ奏者に頼んで無料でレッスンをしてもらったのである。彼は一生懸命練習を重ね、そのオーケストラの傍に座って目と耳を使

って改善に努めるほどになった。そして大会のとき、オーケストラのある演奏者は、数百ドルもする弓を貸してくれたのであった。

このグループが大会前に全員で練習したのはわずか2回、しかし見事な演奏だった。懸命に祈り懸命に練習を重ねた彼らに、主の助けがあったのである。このような話はほかのグループにもたくさんあった。たゆまず努力を重ね、長旅の末にやっとの思いでできたリハーサル。この彼らの努力に、主は報いられたのである。

こうした各グループの発表もさることながら、フィナーレはまさに壮観であった。拍手はいつまでもなりやまず、アンコールを求める声があちこちからあがった。曲目はノルウェーの作曲家エドワード・グリーグによる「発見」であった。

大会の連絡調整にあたったスウェーデン地区担当十二使徒会地区代表のリード・H・ジョンソン兄弟はこのように語っている。「私は祭典のことを心に描いたとき、フィナーレはその曲をおいてほかにはないと思いました。」彼はそのことを委員会に話さなかった。ところが彼らが提供してきたプログラムを見ると、フィナーレは「発見」となっていたのである。だがすでにノルウェーの人々がこの曲を自分の国の発表曲として選び、練習に入っていた。しかし、大西洋をはさんで同時に靈感が与えられたことを知ったノルウェーの会員たちは、進んでこの曲を辞退し、新しい曲を選ぶことにしたので



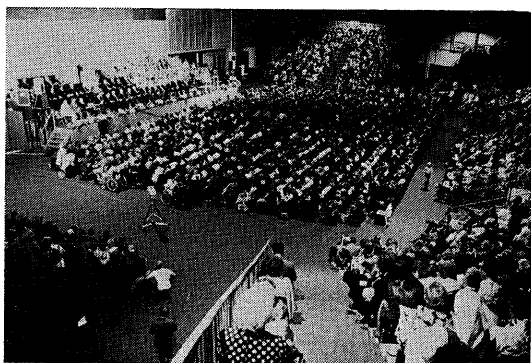
(左からバックー、ハンター、ベンソン各長老)



大会会場外観



キンボール大管長



会場内部



フェスティバルに出演した少女

あった。

フィナーレの指揮にあたった73歳のノルウェー人、ラム・アルベスターは、その経験をこう語る。「この場にいた人でなければ、この全員の合唱の意味はわからないでしょう。御存知のように私たちは、たとえ教会員同士でも、他の国の人に対して警戒心を持つものです。しかしこのフィナーレは私たちをひとつにしてくれました。特に私たちの若人を。今ここには一致のスピリットが、何でも力を合わせてできるのだというスピリットがあります。この一致の心というものは、決して小さな賜ではありません。」

この一致のスピリットは、大会を通して人々の心を満たした。隣同士に着席した4つの国の聖徒たちは、それぞれの国の言葉で流れて来る説教を聞き、同じみたまに満たされたのである。大会では36の説教がなされたが、それぞれ4カ国語に通訳しなければならず、結局延べにして144の説教が行なわれたことになる。これを達成するために60名の通訳者が必要だった。通訳された話は聴衆の頭上に張りめぐらされたアンテナから小さなヘッドホンを通して一人一人の耳に伝えられた。このようにして各国の人々はヘッドホンを自国語のチャンネルにセットし、会場のどこにいても説教を自国語で聞くことができたのである。

もちろん以上述べたことはほんの枝葉末節にすぎない。肝心なのは、大会に出席した人が、準備のかいあって靈感に満ちたすばらしいメッセージを受けることができたということである。この大会には、大管長会からキンボール大管長とタナー副管長が出席、他に10人の幹部が出席した。十二使徒評議員会からは、エズラ・タフト・ベンソン会長をはじめハワ

ード・W・ハンター、ボイド・K・パッカー、ブルース・R・マッコンキー、また十二使徒評議員会補助からはバーナード・P・ブロックバンク、ジェームズ・E・ファースト、J・トーマス・ファイアンズ、ニール・A・マックスウェルの各長老たちが、それに七十人最高評議員会会員のA・セオドア・タトル長老、管理監督会のボーン・J・フェザーストン監督も出席した。この10人が全員、出席した人々に励ましとなり導きを与える、靈感あふれる説教をした。

土曜日の夜の両親の夕べに参加した人々は、世の中の悪の力がますます大きくなりつつある中で、ホーム・ティーチングと家庭の夕べがどれほど大切かをキンボール大管長の話から悟ったに違いない。「父親が子供を教育するということは創世のときから基本となってきたことです。主がそのように定められたのです。主はこの世の人々が健全な生活へ、真の家庭生活へ、そして家族がお互いに信頼し合う生活へと帰ることのできるプログラムをお与えになりました。それは父親を家長という正しい地位に返し、母親を社交生活や仕事から、子供をたわむれの場から家庭へと引き戻すものです。」

またキンボール大管長は、土曜日の夕べに集まった若人に、彼が少年の頃、戒めを守り決して信仰から離れることがないようになろうと決心したことを話し、いかなる誘惑にあってもいつも毅然としていられるように同じような決心をなささい、と励ました。

タナー副管長は、土曜日の夜の集会に集った両親を前にして、両親の模範と子供のしつけが大切であることを述べた。「夫が福音に従って生活し、神権の義務を全力を尽くして遂行し、妻があらゆる点で夫を助ける家庭。愛と一致が見ら

れ、共に祈り家庭の夕べを毎週行ない、息子や娘を天父のみに連れ帰ることができるように正しく育て上げる家庭。そのような家庭ほど素晴らしいものは考えられません。」

そして日曜日の朝の神権指導者集会では、面接の仕方についてタナー副管長が大切な指示を与えた。続く一般大会では同じタナー長老が1830年の設立から今日までの教会の発展経過を話し、この大会の主要なテーマのひとつとも言えるべき伝道の義務について次のように述べた。「確かに全世界の、キリスト教徒を自認しキリストを信じる人は、キリストの教会に加わりたと思うでしょう。……キリストの教会の会員である私たちの責任は、どこにあっても、主の教会と主の教えから利益を得られるような生活をする事です。そうすれば福音を聞く人の心に疑問は生じないでしょう。」

日曜日の午前の集会で壇に立ったベンソン会長は、第2次世界大戦直後の荒廃の中でヨーロッパの聖徒と共にした経験から話を始め、彼がスカンジナビアの人々を心から愛しており、またスカンジナビアにおける教会の発展には主のみ手が働いていることを証した。そして聖徒たちにすべての戒めを守るように勧告した後、国の指導者に対して次のような神聖な証と警告を与えた。「神はキリストの再臨の備えとして地上に末日の王国を設立されました。私は主の僕として国々の指導者に、神の前にへりくだり神のみたまと導きを受けるように要求します。悔い改めて悪の道から立ち返るように求めます。もし拒むならば、悪を行なう者にくだる恐ろしい裁きと災難が、予言された通りにあなたがたにくだるでしょう。」

大会を通して常にみたまがあった。それは教会幹部の話からだけでなく、地区代表や副伝道部長、選ばれて壇に立った父親母親、それに青少年の指導者からもほとぼり出るものであった。また参加国合同編成の大聖歌隊も大会に集う人の心に深い印象を残したに違いない。

キンボール大管長は最後の集会が終了したときに再度壇に立ち、聖徒たちに語りかけた。そして大会期間中の幹部の説教を簡単にまとめ承認した後、次のように語った。「素晴らしい大会でした。生涯この感動を忘れないようにしたいと思っています。」

そして大管長は大会のテーマである伝道の義務について再び取り上げ、この神権時代初期の教会の発展について述べた後、当時の宣教師がどのようにして隣人やまわりの地域に伝道したかを紹介した。そして集まった会員たちにこのように語った。「あなたがたここにおられる4千名の皆さんは、私たちが合衆国から送る宣教師よりももっと良い働きができます。私たちには光があります。真理があります。私たちには、まわりの人々を啓発することができるものはすべて備え

られています。ろうそくをますの下に置いてはならないのです。主は私たちが義務を果たすならば救えるはずの人々に対して、私たちにその責任を問われるでしょう。」

勧告に加えてキンボール大管長は聖徒に天父の祝福があるように願った。そして孤独で悩む人々にこう語っている。「家族の中でただひとりのキリストの証人として暮らしておられる方もいることでしょう。孤独の中にあっても忠実かつ誠実に生活する人に神は祝福を与えられます。」

「さようならを言うのはつらいことです。」こう述べたキンボール大管長は、「これは神のみ業です」と証し、スカンジナビアの聖徒たちに祝福があるよう天父に請い求めた。

別れの言葉を告げるのは確かにつらいことであった。閉会の歌と祈りが終わっても聖徒たちはその場を離れず、「来たれ予言者より」と「神よまた会うまで」を歌った。そして三々五々会場を去る人々の目には光るものがあつた。涙はすぐにかわくだろう。しかし大会の記憶は長く脳裏にとどまるにちがいない。大会に参加した人々は新たな強さと決意を胸に、もう自分はひとりではないことを認識して進んでいくことだろう。

ある兄弟はこう語った。「私たちは出席が30人から80人位の支部から来ました。4千人もの教会員と共に集うということがどんな意味を持つかわかりますか。特に若い人々にとってどういう価値があるか。もう私たちは寂しくはありません。本当の力を見たのですから。もう恐れる必要はないのです。」

ある妹妹はこう述べている。「大会の感動は口では言い表わせません。大会は空気であり太陽であり、花であり雨でもあります。私にとってまさに命とも言えるべきものです。」

こう言う人もいた。「しなければならぬことがあるんじゃないでしょうか。一生懸命やれば主は必ず助けて下さいます。」

確かに主は助けて下さるであろう。なぜなら今やスカンジナビアの聖徒たちには大きな力が宿り、彼らの国々には福音に耳を傾けようとする選ばれた民が大勢いるのだから。教会設立当時ユタに渡り、教会の確立と発展に寄与した人々の中にはスカンジナビアの数千人に及ぶ信仰厚い忠実な聖徒たちが含まれていた。このようにスカンジナビアの聖徒たちは、大会の祝福を受けるべくして受けたのである。今や北欧の国々にとどまって働く聖徒たちには力とみたまが与えられ、主の僕の口を通じてもたらされた勧告に従うときに大いなる成長と発展が見られるであろう。確かにデンマーク、フィンランド、ノルウェー、そしてスウェーデンの国々は、もはや過去に帰ることはないのである。

執事の役割

管理監督会第二副監督

ボーン・J・フェザーストーン

何年か前、私は忘れられないおもしろい話を聞いたことがある。

ある若い男が岩ばかりの高い山の頂を目指して登っていたところ、わしの巣を見つけた。巣には卵がいくつか入っていた。彼はそのひとつを取り上げると、大事にそれを家に持ち帰った。そしてめんどりが卵をあたためていたので、その中に入れた。やがて卵はみなかえり、ひよこにまじってわしのひなも誕生した。それから数カ月間、わしのひなはひよこと一緒に成長した。そしてこのひなは、ひよこと同じように小屋の中の地面をつついてえさを求めるようになった。すっかり大きくなってこのわしはまだ飛んだことがなかった。若者はこの成長過程を非常に興味深く観察していた。そしてわしを飛ばせたいと思うようになった。そこである日わしを自分の家の屋根に連れてあがり、こう言った。「おまえはわしだ、飛べ。」しかしわしは庭に舞いおりて、にわとりのようにえさをついばみ始めた。その後数日経ったある朝、陽がのぼるよりずっと早く、この少年はわしを高くそびえた岩山の峰に連れて行った。そして、朝日の最初の日ざしが山々の頂上を照らし始めたときに言った。「おまえはわしだ。飛べ。」わしは翼を広げ、眼は陽光を捕えた。ある種の力が翼のはしからはしへと走った。新鮮で涼しい大気、木々の香り、それにこれまで味わったことのない興奮がこの鳥の王者の体をよぎった。翼をぐっと一杯に広げると力が全体にみなぎるのが感じられた。そして若者の手を離れて舞いあがった。間もなく

高い頂の何百メートルも上をゆうゆう舞うのであった。それからますます高くあがり、限りない空のかなたへ飛んで行った。地面にしばられているにわとりが一生かかっても見られないものを、わしは一瞬の内に視界におさめたのであった。それ以来、わしは決して小屋の中の鳥で満足することはなかった。

執事もひとたび神権をまごころから行使し、限界のない奉仕に打ち込んで、その力と爽快さを覚えれば、決して小屋の中の鳥、言いかえれば普通の少年にもどることに満足しないだろう。地上において神を代し、神の清い選り抜きの僕になりたいと思うにちがいない。

執事は、「ことごとく各々に賜わる神の賜と召とによりてその職に按手聖任せらるべく、これを聖任するものの中にある聖霊の能力によりて按手聖任さるものとす。」(教義と聖約20:60)

「正式に組織せられたるわが教会支部のある所にありては、何人といえどもその教会支部の支持の挙手によらずしてはわが教会内のいかなる職にも按手聖任さるる能わず。」(教義と聖約20:65)

執事の義務には、聖餐のパス、教会員の家庭を訪れて断食献金を受け取ること、監督や副監督のメッセンジャーになること、さらに祭司や教師が少ないときには後輩同僚としてホーム・ティーチングをすることがある。以上の責任は、ほとんどすべての執事が知っていることである。

執事はまた細かいが非常に大切な責任も負っている。

服装の標準、すべての執事はその義務を果たすとき、ふさわしい服装をするように求められる。聖餐を配るときには、ワイシャツを着用し、ネクタイをつけていなければならない。似つかわしくない容貌で人目を引いて、故意に神権の儀式を汚すようなことは許されない。髪の毛の長さは、女性のような外観を呈してはならない。言いかえれば会員の注意を髪によってそらすようなことがあってはならない。

監督のメッセンジャーをする少年は、こざっぱりした服装をし、清潔でなければならない。また監督が誇りに感じるような姿でなければならない。会員の家を訪問するときは、きちんとした服装をして神権の割当てを果たさなければならない。まれには、不活発会員の唯一の教会との接触が、断食献金を集めるために月一度執事の行なう訪問だけという場合がある。この場合、この短い訪問が不活発会員に大きな影響を与える。執事はこざっぱりして清潔で、暖かみと友情を感じさせながらも威厳のある行動を取らなければならない。まごころからあふれでる笑顔と堅い握手は、不活発会員に大きな影響を与えずにはおかないだろう。ホーム・ティーチングの割当ても同様に威厳をもって果たされなければならない。また執事は先輩同僚から求められればいつでも家族に証をする用意ができていなければならない。

行ない：執事はどんな立場におかれても、正しくふるまわなければならない

い。特に聖餐台の前にいるときに気をつけなければならない。中には、遊んだり、おもしろい顔をしてみせたり、笑ったり、果ては執事同士つき合ったり、一般にこの神聖な儀式を全く軽はずみな心でみている未熟な執事を目にする可能性がある。このような執事には、主がこの儀式を手伝うように求められた神聖な信任に背いていることを教える必要がある。執事の行ないを律する標準はただひとつである。教会には二重の標準はない。執事は、汚ない話をしたり、ポルノ雑誌を読んだり、下品な言葉を使ったり、あるいは乱暴を働いたり無作法などしてはならない。標準に沿って生活するように思慮深くならなければならない。標準に沿う人は、この世で成功を収め、神の王国で奉仕する機会を豊かに得るにちがいない。

徳性：神権の割当てはみな私たちがふさわしいときに与えられる。執事はいつも正直にふるまわなければならない。執事の行ないと言葉は真理を反映したものでなければならない。家や学校や娯楽場で嘘をついたり、不正を働いたりして、この徳を汚してはならない。執事は純潔を守って、思いも清くしなければならない。決して知恵の言葉を破ってはならない。毎日ふさわしく生きられるように、心を砕くべきである。そうすれば、必ず成長し、進歩して、成功を収めるだろう。私たちが個人として達成し得る最大の目標は、心の清い者になることである。ふさわしく生きようと誠意をもって努めるとき、私たちは心の清い者となるのである。

奉仕：何年も前、私はマリオン・G・ロムニー副管長と大会に出席したことがある。集会と集会の間の休み時間に、私たちは少し散歩した。そのとき、副管長は私にこう言われた。「フエザーストーン兄弟、神権者たちは隣人に

奉仕するために生まれてきていることにいつか気づくと思いますか。」ロムニー副管長のこの一言は、それ以来私にとって大きな活動源となっている。皆

さんもこの言葉を味わうようお勧めしたい。私はすべての執事が、隣人に奉仕するために生まれてきていることを知るように、心から祈っている。



「おまえは
わしだ。
飛べ。」

教師の役割

管理監督会第一副監督

H・パーク・ピーターソン

この主題について考えていたとき、私は最近聞いた作者不詳のある物語を思い出した。

何年も昔のこと、霧深いロンドンの町で、夜駅へ行ってはカンテラを使って人々をそれぞれの目的地まで、狭い霧に包まれた道を案内し、それによって得た報酬で未亡人の母と5人の弟と妹を養っていたある若者がいた。あるときこの若者はひとりの人からロンドンのこれこれの所に連れて行って欲しいと頼まれた。その夜、霧はことのほか深く、丸石で舗装された道はすべりやすく危険であった。この若者は自分にとっても危険であることがわかっていたが、その依頼に応じた。そしてふたりは駅を出て、カンテラを持った若者がその紳士の先に立って進んだ。何時間も歩いてやっと目的地に着いた。そこに着くと、紳士は約束の礼を彼に払った。若者は感謝してそのお金を受け取ると、足早に駅に取って返した。そして駅に着くと、急に霧の中から何人かの人が出てきて、それぞれさきほどと同じくらいのお金を払おうとした。最初若者は自分がそれをかせいだとは思えなかったの、受け取ろうとしなかった。するとひとりがこう説明した。「私たちはみなこの霧で道に迷い、どこにいるのかさっぱり見当がつかなかったんだ。そうこうするうちに君のカンテラが見えたので、遠くからその光についてきたというわけだ。安全な所まで案内してくれたので、礼をしたいんだ。ただそれだけだ。君のカンテラが見えなかったら、今も霧の中を迷っていたことだろう。」

教師は、迷っている人を助けようとするとき同時に他の人々をもよい方向に向かわせていることに気づかないか

も知れない。教師が神権を行使して奉仕に努めるとき、その教師はほかの人が従って行ける光となっているのである。

ソルトレーク・シティーのテンプルスクエアを訪問したことがある人がたくさんいるだろう。神殿の西側の壁に興味深いものが幾つかある。そのひとつは、大熊座という星座である。ハロルド・B・リー大管長はかつて1961年7月2日曜日に開かれた伝道部長セミナーで、これの表わす意味について説明した。リー大管長は、話を始めるにあたって、ソルトレーク神殿の建築中にプリガム・ヤングが建築家トルーマン・O・アンゲルに、ある記事をミレニアル・スターに寄稿するよう依頼したことを取り上げた。これは外国の聖徒がそれを読んで、この建築計画に財政的な援助をする必要があることに気づいて欲しかったために依頼したものであった。アンゲル兄弟はその記事の中で、神殿の外面に描かれたものが何を意味するか説明している。リー大管長はアンゲル兄弟の記事について次のように語った。

「太陽を表わす太陽の石、それに月の石と星の石がある。それはあなたがた皆が見た通りである。またそこにはさらにほかのものもある。彼が言ったものの中で、もうひとつ特別に意味のあるものがある。このことについて考えていただきたい。彼は、神殿の西側の塔の胸壁の下で、一番高い窓のすぐ上に、大熊座が描かれるだろう、と言っている。私たちはこれを北斗七星と呼んでいる。この大熊座のひしゃくの先端のふたつの星は、北極星を指している。これは、『神の神殿によって、道に迷った者が道を見いだすことがで

きる』ことを示しており、人々にそのことを思い起こさせようとするものである。」

教師はこの神権者の軍勢に欠くことのできない者で、教師には人々を導き、指示し、教え、また啓発する務めがある。そして教師はこれらの務めを果たすとき、道に迷った者がその道を見いだせるように助けていることになるのである。

アロン神権の教師は、ホーム・ティーチングを行ない、聖餐の準備をし、案内人として動き、求められれば執事のすべての義務を果たす責任を受けている。これらの義務を勤勉に果たすとき、主から託された「常に教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強くすべき」（教義と聖約20：53）神聖な務めを果たしているのである。

教師の義務はそれぞれ皆大切である。1970年10月の総大会で、ビクター・L・ブラウン監督は次のように言っている。「アロン神権は、ただ若い男子を多忙にし、問題を起こさないようにするための活動プログラムにすぎないという考えは間違っている。これは地上における神の王国統治体の一部分である。アロン神権を持つ人々は、各自の義務を果たすとき、主の業の達成を助け主の栄光を表わす力を授けられているのである。…」(Conference Report「大会報告」1970年10月〔英文〕P125)

ホーム・ティーチングを行なうことによって、教師は人々の生活に祝福をもたらし、永遠の生命に導くという特別な機会に浴するのである。私の知人が、ある経験を話してくれたが、その話はこのよい実例である。「最近ある兄弟と教師の年齢のその息子が、私たちが

族のホーム・ティーチャーに割り当てられました。私たちは少年の父親の福音に対する献身をよく知っていましたが、外見上、容貌も行動も父親に似て献身的に見えるその息子がどんな青年か私たちは知りませんでした。そこで最初の訪問の間中、私はこの少年に注目していました。彼はつつましく控え目でしたが、その言動ひとつひとつから彼が神権を誉れに思っている気持ちが伝わってきました。それからすぐに私たちは、1年前に息子を失い、また妻が現在身ごもっていることを彼らに告げました。そのときからふたりは私たちにとって特別な存在となりました。私たちのために祈り、私たちを励ましてくれたのです。最初の訪問を終わるにあたって、私はこの少年に祈りを頼みました。すると少年は祈りの中で、主に、子供を失った私たちを支え、もうすぐ生まれる赤ちゃんを祝福して下さるように願ったのです。特に私の妻が無事に出産できるように祈ってくれました。それを聞いて妻も私もこの若い教師の誠意と細かい神経に心を打たれました。その日以後この兄弟たちは、しばしば(月に1度以上)私たちを訪ねてくれました。赤ちゃんが生まれると、この少年は父親と贈り物をもって訪れてくれました。そして私たちが皆そろってひざまずいて祈ったとき、この教師は赤ちゃんが無事に生まれたことを主に感謝してくれたのです。」この少年は主から与えられた責任の重要性をよく理解していた。ほかにも同様の例をあげることができる。ホーム・ティーチングは、人々の人生に祝福をもたらすために神権を行使するひとつの方法にすぎないのである。

教師であるあなたは、教会の中で特別な役割を担っている。教師の職はアロン神権に属する欠くべからざる付属の職である。(教義と聖約84：30) この職が必要であることから、その職を満たす人も必要になってくる。教師は、自分が教会を必要とするのと同様、教

会も教師を必要としていることを理解しなければならない。

教師は教会の中における自分の役割を理解していなければならない。一部の人は神権の義務を果たすことに対して、無頓着である。これはひとつには与えられた責任が十分認識できていな

いためである。私たちは与えられた義務を果たすときに、自分の役割を最もよく理解できるものである。

主の祝福が一人一人の教師の上にあって、自分の役割を理解し、立派に果たして自己と天父なる神に誉れと栄光が帰されるように。



「妻も私も
この若い教師の
誠意と細かい
神経に
心を打たれました。」

祭司の役割

管理監督

ビクター・L・ブラウン

私はカナダの西部にいた子供の頃から馬が大好きだった。15歳になる頃まで、父は私と兄弟にいつも馬を1頭持たせてくれた。そして何年か経つうちに数頭の馬が入れかわり私たちのものとなった。その内幾頭かはぱっとしないポニーだった。しかし中の1, 2頭は元気のよい、良種の馬であった。若い祭司のときから50歳くらいまで、馬に対する愛情は変わらなかったが、事情で馬を持つことができなかった。しかしここ数年前から再び私は良種の雌馬を飼っている。

毎日が忙しく馬と接する時間は制約されているが、馬は私にとって幸福の源であった。しかしもっと大事なことは、彼らがきわめて価値のある教訓を与えてくれたことである。それによって私は、若いアロン神権者としても、成人としても神権を尊ぶことの大切さを教えられた。この教訓の一部を紹介しよう。

ある日父は、美しい元気のよいサラブレッドを連れて帰ってきた。この馬はポロ戯（馬に乗ってするホッケーに似たゲーム）のためによく訓練された馬であった。この馬はたまたま体が小さく、買手がつかずに1頭だけ残っていたのを、父が買ったものである。この贈り物は、それまで私がもらった贈り物の中でも最もすばらしいものであった。男の子ならだれでもこんなすばらしいものをもらったら夢中になるにちがいない。野うさぎのようにとっさの間に走り出すことができた。また、すぐに止まることも、走っているのと変わらないくらいの速さでバックすることもできた。ほかの馬にできることは何でもこなせた。しかもほかの馬よりもよくできた。この馬はサラブレ

ッドであった。しかしひとつの欠けている点があった。それは私が乗ると必ず乗せたまま好きな所へ走っていくという癖であった。たぶん私の手落ちだったのであろうが、とにかくこの馬は権威を受け入れようとしなかった。一度駆け出すと私がどこへ行きたかろうとおかまいなしにつつま走るのだった。この馬は反抗的な馬であった。そしてせっかくの訓練も才能も、強情で権威を嫌ったために全部失われてしまった。私たちは初めレディーと呼んでいたが、間もなくそう呼ばなくなり、とうとう手放してしまった。

クリッパーは美しいくり毛の馬であった。この馬はサラブレッドと、よく訓練された作業用ポニーの混血であった。1日ずっと乗りまわした後野原に放すと、後ろ足をけあげて、快活な子馬のように走りまわり、とびまわった。ある日私はクリッパーに乗って牛を家の方へ追って行こうとしたが、うまくいかなかった。そこで私は牛にロープをかけ、そのロープを馬の鞍頭に巻きつけた。ところが牛がロープをびんと張ったとき、鞍の止め具がこわれて私は鞍もろとも落ちてクリッパーの下になってしまった。しかしそれまで勢いよく駆け、興奮していたクリッパーは、その途端びたりと止まって、私が危険から脱するまで一歩も動かなかった。

さて次は、最近数年前に手に入れたケイティーである。ケイティーは非常に誉れある血統の馬で、親はいずれもチャンピオンであった。赤味がかった茶色の美しい馬であった。利口で、いつも頭をきりりとあげていた。このケイティーの最初の子は馬具をつけての競走や足並みをそろえる競争でたくさんのリボンを獲得してきた。

最初ケイティーを手に入れたとき、彼女の状態はあわれだった。酷使され、その上十分えさを与えられていなかった。しかし私はよく世話をしてやればそれ相当の馬になると思った。そして事実そのとおりであった。ケイティーは私が持った馬の中で最も毛並みがよく、きれいな馬であった。この馬はただひとつのことを除けば、本当に優秀な馬になり得る素質を持っていた。それは適切な訓練を一度も受けていなかったことである。若い頃に受けた訓練も訓練と呼ぶにはあまりにも貧弱であった。しばらくの間乗るのには楽しかった。あと足ではねるように歩き、頭をきりりとあげ、足を高くあげ、外観もすばらしかった。しかし一度驚くか、見知らぬものに会おうと、すっかり度を失ってしまうのであった。ある日ケイティーは1匹の犬に驚いた。それで後ろ足で立ちあがり、おおむけに倒れてしまった。私はその下敷になり、足にけがをした。それからケイティーはもがいてやっと立ちあがると、おびえた鹿のように走り出した。あの美しく利口なケイティーは、今牧草地に放たれている。

スージーはケイティーの子で、現在6歳である。スージーも母に劣らず美しい。3年ほど前に若干の訓練を受けたが、それ以来訓練の成果が活用されることはめったになかった。それでほとんど訓練を受ける前の水準に退歩してしまっただけで、定期的に活用されていれば今でも乗馬に格好のよい馬であったにちがいない。

立派な青少年の知性が、馬の知性と同じであるなどとは毛頭思っていない。しかし、以上のことから学ぶものはあると思う。あなたがたアロン神権

の祭司は、高貴な血統に属するものである。大いなる力と無限の可能性を持つ神の子である。あなたがたは過去5年間か6年間、人に与えられる榮譽と責任の中でも最高のもののために訓練を受けてきた。これは何かと言えば、神の名によって行ない、あなたがたの行為を天において裁可していただく力、すなわちメルケゼデク神権である。訓練を受ける過程において、あなたがたは管理役員から、特にあなたがたの定員会の会長である監督から教を受けてきた。監督は聖餐の儀式やバプテスマについて指導し、ホーム・ティーチングの責任について教えてきた。そして今アロン神権プログラムの運営についてあなたがたを指導している。また人々の前によい模範であるためには、容姿はもとより内外ともに清くなければならないことも教えてきた。

あなたがたが聖餐の儀式を行なうとき、教会員はそれを通して主と誓約を新たにすることができるのである。これはあなたがたの神権の力によってするのである。またバプテスマを施すとき、あなたがたは、ヨルダン川で救い主にバプテスマを施したバプテスマのヨハネの持っていたと同じ神権を行使しているのである。また、「各教会員の家庭を訪れ、彼らが声を挙げてみよ、祈りをなせ、またすべて家庭の務めにいそむように勧め」（教義と聖約20：47）るときも、あなたがたはホーム・ティーチャーとして神権を行使しているのである。

以上の教訓をよく理解すれば、隣人に奉仕して始めて実現できること、すなわち神への奉仕ができることに気づくだろう。以上の原則はサタンの力を克服する上で大きな力を持つ。サタンの力は、反抗というかたちで表われる。上記の教訓に沿えば、あなたがたは権威のある人と調和し、宣教師として働く備えのできた本当のサラブレッドになることだろう。また神殿で結婚し、教会で指導的な地位につくことだろう。

私は監督と共にあなたがた一人一人を心から信頼している。また神権を十分尊重するとき、それぞれ独自の方法で地上における神の玉国建設に加わる

ことになるのである。あなたがたが立派な神権者を目指して前進し続けるとき、主の祝福があなたがたの上にあるように。



……間もなく

レディーと呼ばなくなり、

とうとう

手放して

しまった。

若い少女たちのために

アーデス・G・カップ

アロン神権MIA若い女性会長会

「彼女たちに本当にできるのかしら？」

「別に若すぎるということもないでしょう。」

「あまりにも経験がなさすぎるわ。」疑問と不安を抱く人もいるが、若人が自分たちの最善を尽くそうと努力している姿を目にする特権に恵まれている人は、この選ばれた世代に心からの確信と信頼を寄せている。

そうです。皆さんもう立派にできるのです。主の約束によれば、あなたがた若人がアロン神権MIAにおける義務と責任について、靈感と啓示を受けられるよう自らを備えるときに主はあなたがたに語りかけて下さる。

あるローレルの会長は次のように話している。「多くの大切な決定を下すようになってから私の祈りは変わりました。皆さんは天父を近くに感じた経験があるでしょう。これは本当に身に余るほどの責任です。なぜなら、私自身と周囲の少女たちの生活にとって非常に大切なことだからです。私は今、主に近くなれるよう一生懸命努力しています。……それは義務ではなく特権です。皆さんが祈るのは自分のためではありません。他の人々のためにも祈っているのです。」

また別の地域では、いくつかのワード部の若人が集まって集会を開いた。時間は遅くなってしまったがその夜、多くの美しく感動あふれる証が述べられた。監督が司会をしていた若い祭司に集会を閉じるよう合図したときにも、椅子は証を述べようとする若人で埋まっていった。そのとき、立ち上がる勇気が湧かなくて2列目で長い間待っていたひとりの少女は、「祈りは答えられる」ということについて是非とも

話したいと思った。彼女はつかつかと説教壇の方に歩み寄ると次のように話し出した。

「御存知のように、私は17歳のクラスの会長に召されました。そしてそのとき私は監督から、あなたはクラスの少女に対して責任があります、と言われたのです。私は驚きで、ただぼう然としていました。少女たちがどういう立場にいるのかさえわからなかったのです。すると監督は私に副会長を決めるようにと言い、主に尋ね求めて祈ることが必要であることを気づかせて下さいました。一体どうすればいいのかしら、どうすれば主が望んでおられる人だとわかるのかしら。」

そして、この若いクラス会長はしっかりと確信に満ちた声で経験を話しはじめた。

「私は紙に17人の名前を書き出し、それから彼女たち一人一人について祈りました。祈り終わるたびに、私はそのリストからひとりかふたりの名前を除く方が正しいと感じました。考え、祈り続けた末、決定するまで3日間もかかりました。そしてやっとふたりだけの名前が残ったとき、私の心は、天父が望んでおられる人がわかったという強い気持ちでいっぱいでした。これが、祈りが答えられた私の経験です。」

証を述べ終えてほっとしたのか、彼女は引続き熱っぽい口調で話し続けた。「私はクラスのみんなを愛しています。そして私は模範となるよう、またクラス内のどの人にも手を差し伸べられるよう努力しています。私たちはひとりも失いたくないのです。」

私は自分の席から彼女のクラスのメンバーがだれなのかすぐわかったが、同時に主が彼女の副会長にだれを望ん

でおられたのかがわかった。ふたりは目にいっぱい涙を浮かべ、自信に満ちた笑みをたたえながら一緒に座っていた。そしてその表情から私は、「ただのひとりも失いたくない」という確信を得たのである。

言うまでもなく、あなたがたはもう立派な証し人である。監督を通して与えられた召しについて愛する天父に導きを求めるとき、あなたがたは聖霊の力を証することができるのである。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」（教義と聖約9：8）

靈感を受け、心の中に確証を得たなら、あなたがたは主のみ手にあって働く器となることができる。そして一人一人の少女、すなわちあなたがたの管轄下にある神のすべての子らに手を差し伸べるという召しを遂行するのである。

もうひとり、ワード部で副会長をしている少女がいる。彼女は次のような方法で実行した。「副会長である皆さんは、どこにあっても模範とならなければなりません。もし模範を示さなければ少女たちと同様に自己を低下させることになります。また会長が決定できないときは、私は彼女と一緒に祈ることができます。これは本当に大きな責任です。」

またある金髪の内気な少女も自分の気持ちを進んでこう話す。「私はクラスの一員です。私はたくさんの割当てはいただきませんでしたけど、参加することによって自分が必要とされている

ことを感じることができます。皆さんも責任を与えられたなら、会長会から自分が信頼されていることがわかるでしょう。割当てを受けるとき、成長し主の助けに頼ることができます。以前私たちにはあまり活発でない人がふたりいました。でも今、彼女たちは出席しています。すばらしいと思います。私は、自分が成長するようにふたりにも成長して欲しいと思っています。私はふたりが出席することを心から願っています。」

私はもうひとつの経験を電話で聞くことができた。

「こんなに遅く失礼ですけど、もう待ちきれなくなったのでお電話しました。」

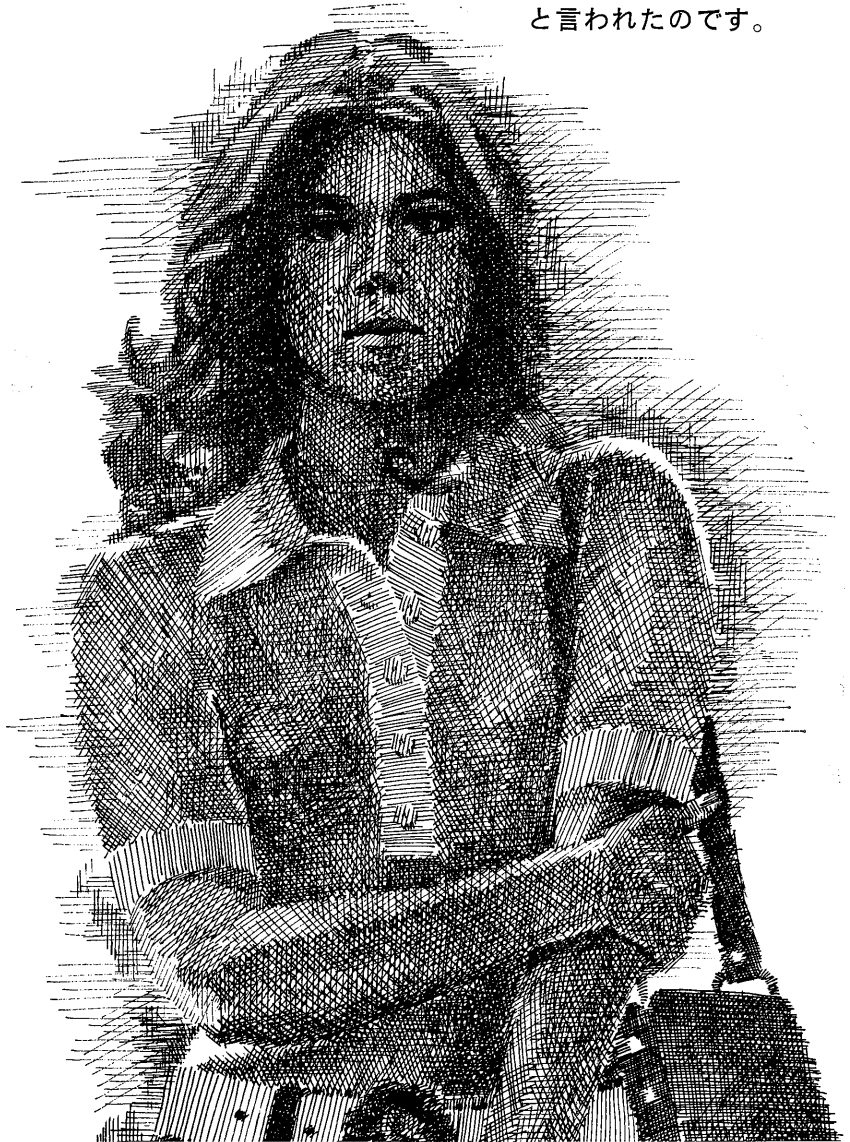
それはわずかな会員しかいない小さな支部の姉妹からの電話だった。

「私にはそれがとてもすばらしい経験になるということがわかっていました。でも、どんなにすばらしいものになるかは想像もつきませんでした。これまでは重大な問題をかかえていたひとりの少女は今、クラスの会長をしているのです。私は、彼女が福音を行動によって経験できるようにあらゆる機会を準備しました。私たちはふたりで問題を話し合い、それからひざまずいて一緒に祈りました。そしてまた、今度はもっとつつこんで話し合い、別れる前にもう一度ひざまずきました。そして今度は彼女がふたりを代表して主に祈りました。目を大きく見開いた彼女は、興奮したような感じでしたが謙遜な面持でした。そしてこうささやきました。『私、今までこんな気持ちになったことは一度もないわ。天のお父様はお祈りを聞いて下さることがわかったわ。』」

「私はクラスの人たちを本当に愛しています。」彼女の声は確信に満ちていた。彼女たちは頼りになります。そして彼女たちが自分の責任を理解するよう私たち指導者が援助するとき、主の業は彼女たちを通して進められるので

「私は17歳のクラスの会長に

召されました。そしてそのとき監督から、あなたはクラスの少女に対して責任があります」と言われたのです。



す。」

今日、重大な責任を負っている若人はいずれも、かのニューフェイのようにこう言うだろう。「……私は主が命じたもうことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それではなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知して

いるからである。』(I ニーファイ3:7)

私は、主が今日、この選ばれた若い世代に主の予言者を通じて語りかけておられることを証する。自らの責任について神の導きを求めるならば、あなたがたは主の目的を成就するため主の（み手にある）器として仕えることができるであろう。あなたがたはもう立派にできるのである。

系図の木登り

出題 エリザベス・L・ニコルス

挿絵 エド・マリオン

最近あなたは本当の意味で系図の仕 か。そうすれば主が私たちに与えて下
事をしたでしょうか。まず小手調べに さった好奇心を最もそそるこの系図の
次の質問に答えてみて下さい。それか 仕事をうきうきしながら進めることが
ら系図活動に移ってはいかがでしょう できるでしょう。

1. 最初に覚えの書を記すようにと言われた旧約時代の予言者はだれですか。(モーセ5：6—8) _____
2. 覚えの書に関係のある旧約時代の3人の予言者の名をあげて下さい。(モーセ5：6—8, マラキ3：16—18) _____, _____, _____
3. 系図に関係のある重要な聖句で同文(多少違いはある)のものを4つの標準聖典の中から、ひとつずつ捜して、下の欄にその聖句の最初の部分を書いて下さい。(聖典を見ないで書くこと。)(マラキ4：5—6, IIIエーファイ25：5—6, 教義と聖約2章, ジョセフ・スミス2：38) _____
4. エライジャはマラキが約束したように再び地上を訪れましたか。(教義と聖約110：14—16) はい—— いいえ——
5. 教義と聖約には「永遠の福音に属けるすべての事項中最も光栄ある」ものは何だと書いてありますか。(教義と聖約128：17) _____
6. 死者の代理のバプテスマによって、ひとやの霊にどのような祝福もたらされますか。(教義と聖約128：22) _____
7. 死者のための業に必要な記録を保持することの大切さはいつから説かれていましたか。(教義と聖約128：5) _____
8. アダムはなぜ妻の名をイブと呼んだのですか。(創世3：20) _____
9. 予言者エノクが知り得たアダムの子らの系図は何に記されましたか。(モーセ6：8—25, 45—47) _____
10. アダムとイブはあなたの血とつながりがありますか。(モーセ4：26 アブラハム1：3) _____

答

- | | |
|---|-----------------------------|
| 1. アダム | 5. 死者のためのバプテスマ |
| 2. アダム, エノク, マラキ | 6. ひとやからはなれたる。 |
| 3. 「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る前に……」聖句を見つけて、残りの部分を読みなさい。 | 7. 世の基が置かれる前から |
| 4. はい, 1836年4月3日に訪れた。 | 8. 彼女はすべての生ける者の母だから |
| | 9. 覚えの書 |
| | 10. はい, ふたりは私たちすべての最初の両親です。 |

大きな第一歩

メアリー・ジョイス・カップス

絵：ジェリー・トンプソン

「シッ、シッ、あっちへ行け！」リトル・ウルフは松の葉がじゆうたんのようによっぱい落ちている上をありったけの力で走りながら、後をふりむいてさげびました。子ぐまはあとをおいながら、さみしそうにないています。子ぐまはお母さんにはぐれたので、お母さいのかわりにだれとでも仲よくしたいと思っていたのです。たとえおびえたインディアンの男の子であっても。

リトル・ウルフはお母さんのために野いちごをとっていたのです。ところが、茂みの中をちらっと見ると、子ぐまが後ろ足でぎこちなく立って、枝にたわわになっているおいしそうないちごに手をのばしているではありませんか。

ウルフは、灰色の子ぐまのおさまなかつこうをおもしろそうにじっと見ていました。ペットにしたいな……と思いましたが、お父さんから「野生の動物の子どもをかわいがってはいけないよ。危険なめにあうからね」と教えられていました。

野生の動物は子供をととても愛しかわいがります。そして子供が危険なめにあっていると感じると特にそれが強くなり、敵から守ろうと荒々しくなるのです。この子ぐまの親もきっとそう遠くないところにいるにちがいない。そう思うとリトル・ウルフはあわてて茂みの中ににげ、子ぐまから身をかくしました。ところが戦士たちのように音を立てずに身をひそめることができませんでした。足で枝をふんずけ、ぴしゃりというむちのような音を立ててしまったのです。

子ぐまはウルフを見つけると、こちらに向ってきました。リトル・ウルフは親ぐまのことを考えました。「あっちに行け！親ぐまのところへ行きな！」ウルフは村に向かって走りながら、そうさげびしました。後ろをふり返りながら走っていたため、ウルフは道に丸太が横たわっているのに気づきませんでした。ウルフは丸太につまずき、もんどりうって松葉の中に頭をつっこんでしまいました。

「お母さんはぼくのことをまぬけのウルフって呼んだ方がいいって、いつも言ってたっけ。お母さんの言う通りだ。」リトル・ウルフはぶつぶつ言いながら起き上がり、ころんだときにとぼしてしまった羽根をきちんと頭につけなおしました。

子ぐまはおいつきました。そしてウルフに飛びつくと、打ったひざをやさしくたたき、あらわになった胸をなめ、鼻をすり寄せてきました。しゅう長の息子がぐまにキスされているところを戦士たちが見たらどう思うでしょう！

リトル・ウルフは子ぐまに棒を何本かなげてじゃれさせ、そのあいだに丸太のところをはい上がり、びっこをひきながら森の開けたところに入って行きました。それでも子ぐまはまだついて来ます。そこにはきらきら光る谷川が流れていて、その土手のところにインディアンのテント小屋がありました。

ほこりまみれになり疲れた男の子が、すぐ後に灰色の子ぐまを連れてとぼとぼと村に帰る姿を笑う人はだれもいません。人々はみなそのすぐ後に怒りくるった親ぐまがいるのではないかと、おそれおの



のきました。お母さんたちは子供たちをせきたててテント小屋の中に入れ、戦士の何人かは矢を弓にかけて、得物を待ちかまえていました。

「ほかの道来ればよかった。もっと村はずれの」とリトル・ウルフはあえぎながら言いました。みんなを危険なめにあわせてしまった！ウルフはいつもよくないことばかりしているようでした。彼はこれまでこれほどほんとうの戦士になりたいと思ったことがあったのでしょうか。すると急にウルフは子ぐまをつかむと、お母さんが呼ぶのもきかないで全速力で森にかけこみました。親ぐまを見つければ、この子ぐまを返すことができる。そしたら村は安全だ。ウルフはこう考えたのです。

「お前は小さいから少しは楽だけど……」リトル・ウルフはつぶやきました。少しつかれてきました。子ぐまは以外に重く、頭を動かしてはリトル・ウルフのあごをなめていました。まるでたわむれあっているようでした。ウルフはいちご畑に近づくにつれてゆっくり歩きました。そして子ぐまをおろすと、おいしそうな紫色の実がたくさんなっている枝の方に子ぐまを押ししました。子ぐまがうれしそ

うに食べはじめたとき、ほっとため息がでました。このようにしてリトル・ウルフは、のがれることができました。

そのとき、茂みの反対側からくんくんという大きな声が聞こえてきたので、リトル・ウルフはあわてふためいてしまいました。運よく大きな木のそばにいたので、その木に登りました。下の方には枝がなかったので、飛びはねて、するすると登りました。木登りはリトル・ウルフの得意中の得意でした。細い木に腕をまわしてよじ登り、おいしげる葉の中にかくれたちょうどそのとき、親ぐまがもう一頭の子ぐまを連れてあらわれました。

母ぐまはあやしげに鼻をくんくんさせながら、子ぐまのまわりをまわっています。目では、これは私の子ぐまであるといい、鼻では何かあるなと警戒しているようでした。というのも子ぐまに人間のにおいがしみついていたので。

リトル・ウルフは息を殺してじっと見ていました。心臓がドキドキしています。もしくまが臭いをかぎつけ、木に登ってきたらどうしよう。木はくまの重みで折れるか、かくれているところが地面につくほどになってしまうだろうな。そしたら木から飛びおりて、にげなければならぬ。しかしウルフはくまが走るのも見たことがあったので、これはうまくやってのけられそうにないと思っていました。くまは歩くのはおぼろげだけれど、走ることにかけては風のようなからな。

リトル・ウルフはお父さんから、くまに追いかけられたときのにげ道はひとつしかない、教わっていました。それは下り坂に行くことです。くまは前足が短いので、坂を下るときゆっくり歩かないと、体が重くなりすぎてころんでしまうのです。

子ぐまが母ぐまに近ようしました。母ぐまが

あまりにも荒々しいのでまた離れてしまいました。

リトル・ウルフはどうしていいのかわからず、母ぐまが用心深く、地面に鼻をつけながら子ぐまのまわりをまわっているのをじっと見ているだけでした。親ぐまが木に近づいてきました。「ああ、だめだ！」リトル・ウルフは息をのみました。親ぐまは後足で立って、荒々しい声をたてながら重い頭をもち上げ、あちこちを見回し始めました。

リトル・ウルフは気分が悪くなり、ゆれる枝にしがみつきのまま、下で歯をむき出して待っている親ぐまを見ました。ウルフおろすことができないとわかった親ぐまはつめで木の幹を引っかきだしました。そうすると木の皮があちこちに飛び散りました。ウルフは、木を倒せないとわかったくまは、次に登ってくるということを知っていました。

そのときです。リトル・ウルフはこれまでこれほどすばらしい音を聞いたことがありませんでした。それはトントンという太鼓の音と、森の中をこちらに向かって来る戦士の叫び声でした。お父さんのオートーしゅう長にひきいられて来たのです。リトル・ウルフを助けるために！

母ぐまは子ぐまたちが急に心配になってきました。そして向きを変えると重い足どりでその場を去って行きました。

「おまえは部族の犠牲になろうとしたんだね。」オートーしゅう長は村に帰りながら言いました。「それはとても勇気のいることだよ。グレー・ウルフ」

リトル・ウルフはうれしくて胸がいっぱいになりました。お父さんはリトル・ウルフではなく、グレー・ウルフと呼んでくれたのです。このできごとでウルフは、おとなへの大きな一歩をふみだしたのです。

信仰をもって

外はあらしです。部屋の中にはお父さんの静かな声だけがひびいていました。お父さんはなぜその日家にやって来た人に粉をわけてやったのかを説明していました。町にはたくさんの病人がいて、それをなおすには粉と水をまぜたものぐらいしか薬がなかったからなのです。

お父さんは子供たちに、家族でだれもこの奇妙な病気にかからないことは特別な祝福だと言いきかせていました。たとえ秋に穀物の収穫がなかったとしても、近所の人やフィルモアを通してウエストコーストに行く開拓者のために荷車を作って、それを粉と交換することもできるのだからと。

ある朝のことでした。お母さんが言いました。「これ以上粉をあげてしまわないでください、お父さん。子供たちのパンを作るくらいしかないんですから。」

お父さんが答えもしないうちに、ドアをたたく音がしました。外には近所



の人が立っていました。そして病気の妻のために粉を少しわけてほしいというのです。

お父さんがカップに粉を入れ、「信仰をもってがんばりましょう。主は恵みをくださいます」と言ってそれを手わたしたときのその人のうれしそうな顔を見て、一番小さな子供までが感動したようでした。

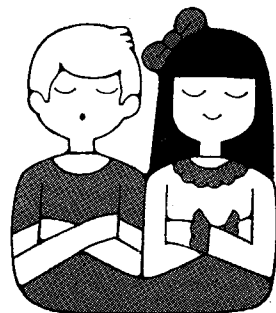
数分後、またドアをたたく音が聞こえ、お父さんがドアをあけると、ひとりの青年が飛びこんできました。そしてとまどいながら「ああ、カーリング兄弟、子供が死にそうなんです。粉を少しいただけますか」と言ったとき、家族はもう断われないということがわかりました。

その青年が粉をもって帰っていくと、お母さんは泣きだしました。お父さんはお母さんの肩にやさしく腕をまわして、みんなで祈ろうと言いました。この寒い冬にみんなが健康で暖かく無事に生活できることを感謝すると、家の中は平安と望みで満たされました。そして自分たちを近所の人々が食物を、特に粉を得ることができるようにと祈りました。

祈った後、お父さんはお母さんに、箱についている粉をかき集めてグレービーを作ったかどうかと言いました。驚いたことに箱にはグレービーは充分すぎるほどの粉があり、少し残しておくほどもでした。

みんなで食べていると、またドアをたたく音がしました。外には男の人が立っており、腕のいい荷車作りの助けが必要なので、お父さんに助けてほしいと言うのです。そしてこう言いました。「ここに20トンの粉を持っているんですが、荷車と交換していただけないか。」

お友だちへ



家族の祈り

クリスタはお姉さんの手伝いで夕食の準備をしながら、手を休めては降りしきる雨をながめていました。雨を気にしているわけではありません。手術のために何百マイルも離れた病院に赤ちゃんを連れて行ったお母さんのことを聞きたくて、お父さんの帰りをいまかいまかと待っているのです。

やっとのことでお父さんが帰ってきました。夕食はとうにできあがっていました。「食べる前にひざまずいて、食事の祝福と家族のみんなが健康で守られるよう特別な祈りをしたいのだが」と、お父さんが言いました。

あらしはだんだんと激しくなってきました。女の子たちがお皿洗いをしていると、お父さんの患者からすぐ来てほしいという連絡が入りました。

ピーターの歌

ピーターは病室をぐるっと見まわしました。きょうはピーターにとって生まれて初めて両親と離れて夜を過ごす日です。看護婦さんはずっとそばにいますと言ってくれましたが、それでもピーターの心はおそろしさでいっぱいでした。お医者さんは次の日の朝の手術のことについて、親切にピーターに話してくれました。

この病院は大きくて、入院患者がたくさんいました。そのためピーターにあてられた部屋は小さく、男子病棟のはじの方でした。大ぜいの男子の入院患者を見て、ピーターはまたまたこわくなりました。ピーターはシーツを口

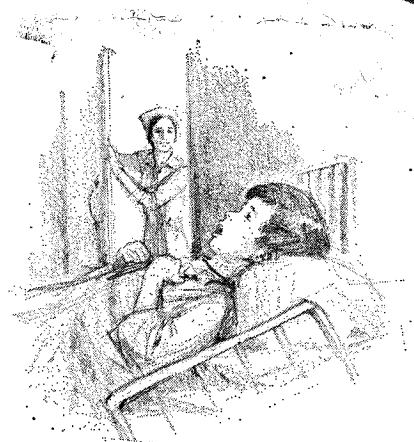
のところまで引っ張り、こわくないよう、さみしくないように祈りました。

祈り終ったとき、心にひとつの歌が浮んできました。それは友だちといっしょに日曜学校でよく歌った、「イエスさまは愛してくださる……」という出だしの歌でした。

ピーターはこの歌が大好きでしたが、今夜はその言葉がいつもとちがっているように思われました。最初小さい声で歌っていたのですが、その声は知らず知らずのうちに大きくなっていました。

ドアの前に立った看護婦さんは、小さなすんだ歌声に耳をすましました。そして男子病棟中にひびきわたりました。

人々は話をやめ、ラジオを消して、その歌に耳を傾けました。「イエスさ

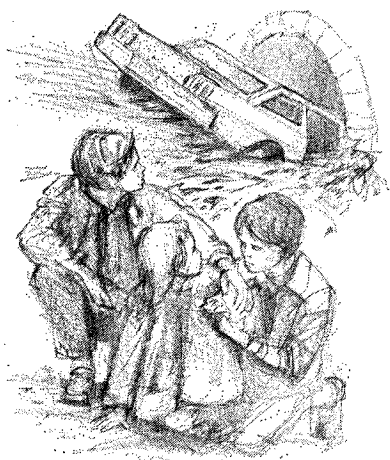


まは愛してくださる……」と歌うのを聞いてなぐさめられ、涙を流す人もいました。

ピーターは歌い終わると、気持ちよく床につき、寝返りをうつとすぐに眠ってしまいました。歌によって祈ることにより、ピーターは安心し、もうおそろしさを感じなくなったのです。

た。その人は歯が痛みだしたので、応急処置をしなければならなかったのです。

クリスタはお父さんといっしょに行きたかったので、水たまりの中をびしゃびしゃと車のところまで歩いて行き、それから患者のところへ向かいました。



お父さんが診察を終え、帰ろうとするときになっても、まだ雨はやみません。高速道路をはずれたちょうどそのときでした。だれかが高い丘の上でしきりに警笛をならしてるのが聞こえました。でもおそろすぎました。

水がどっと車におしよせ、車をもち上げ、ひっくり返してしまいました。お父さんはやっとのことで窓をあけると、クリスタを外へ出し、少年がふたりがかりでクリスタを安全なところに連れて行きました。しかしお父さんはどっと押しよせる洪水に流されてしまい、車からのがれることができませんでした。

それからお父さんは自分が車からなげ出されているように感じました。暗くて長い排水トンネルに吸いこまれる前にお父さんが聞いた最後の声は、少年たちの腕の中でもがきながらお父さ

んを助けようとして「お父さん、お父さん」と叫ぶクリスタの声でした。お父さんはあえぎながら排水トンネルの中に押し流されてしまいました。ところがトンネルのはじまで来たときです。力強い腕がうずまく水からお父さんを引き上げてくれたのです。

不思議な経験のあと、クリスタはお父さんと会うことができました。お父さんはけがをしましたが、奇跡的に助かりました。

お父さんの腕の中で、クリスタは喜びでいっぱいでした。

「特別な祈りの答えが与えられたんだね」とお父さんは言いました。

クリスタはにっこりしてお父さんを見上げ、大きくうなずきました。クリスタはこの愛を感謝の気持ちをどう言葉にあらわしたらいいのかわかりませんでした。

ふたつの塩の海

ナンシー・M・アームストロング

絵：ディック・ブラウン

ガリラヤの海はイエスの生活について書かれているものの中にはいたるところにでてきます。淡水湖で魚のたくさんいるこの湖は、長さ22キロ、はばは最も広いところで13キロです。この湖のそばの丘の上で、イエスはパンと魚の奇跡を行なわれました。また荒れ狂う海をしずめ、水面の上を歩かれたのもこのガリラヤ湖です。

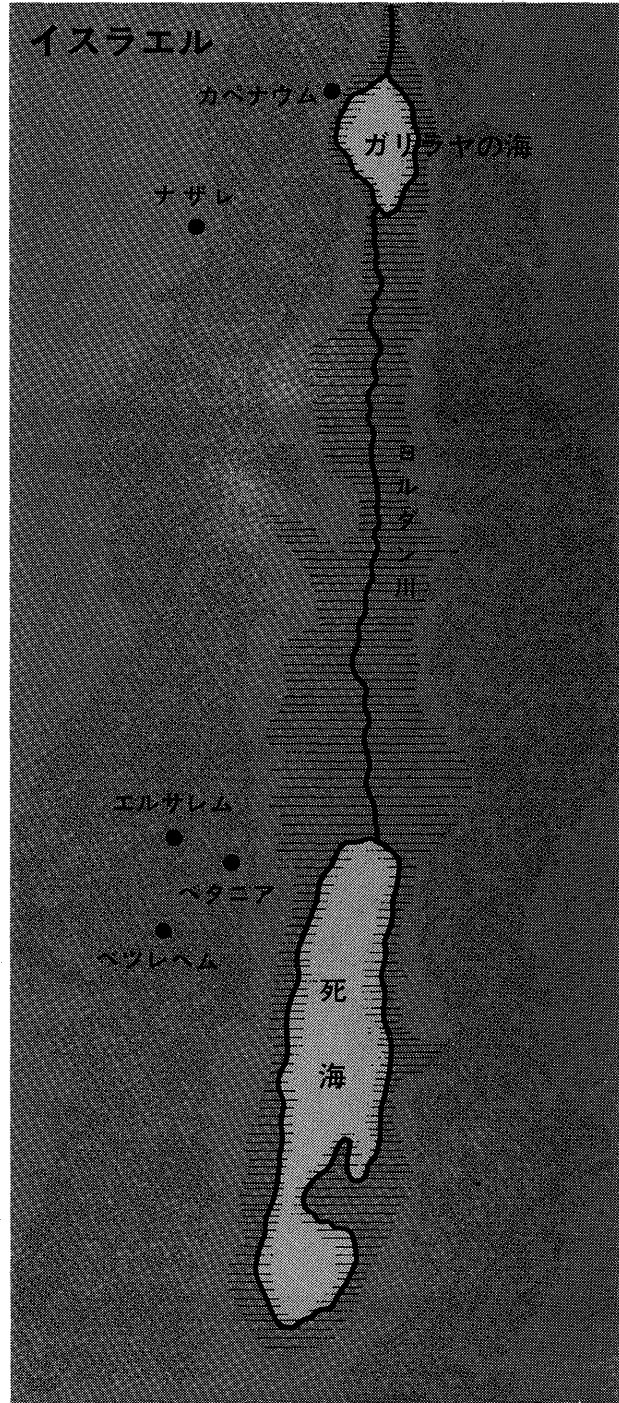
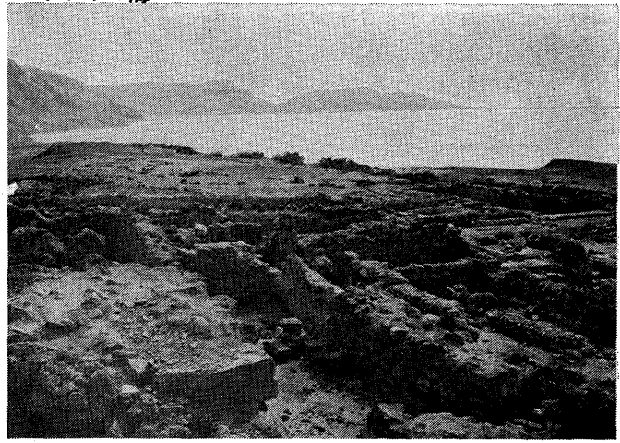
ガリラヤの海から104キロはなれたところに死海があります。ガリラヤの海から死海にはヨルダン川が注いでいますが、曲がりくねって流れているために全長182キロメートルもあります。

イエスがお生まれになった小さな町ベツレヘムは死海から西へ22キロ行った所にあります。死海には何も住むことができません。それはこの海には水の流れる出口がひとつもないので、塩分が海水に比べて六倍もこいからです。

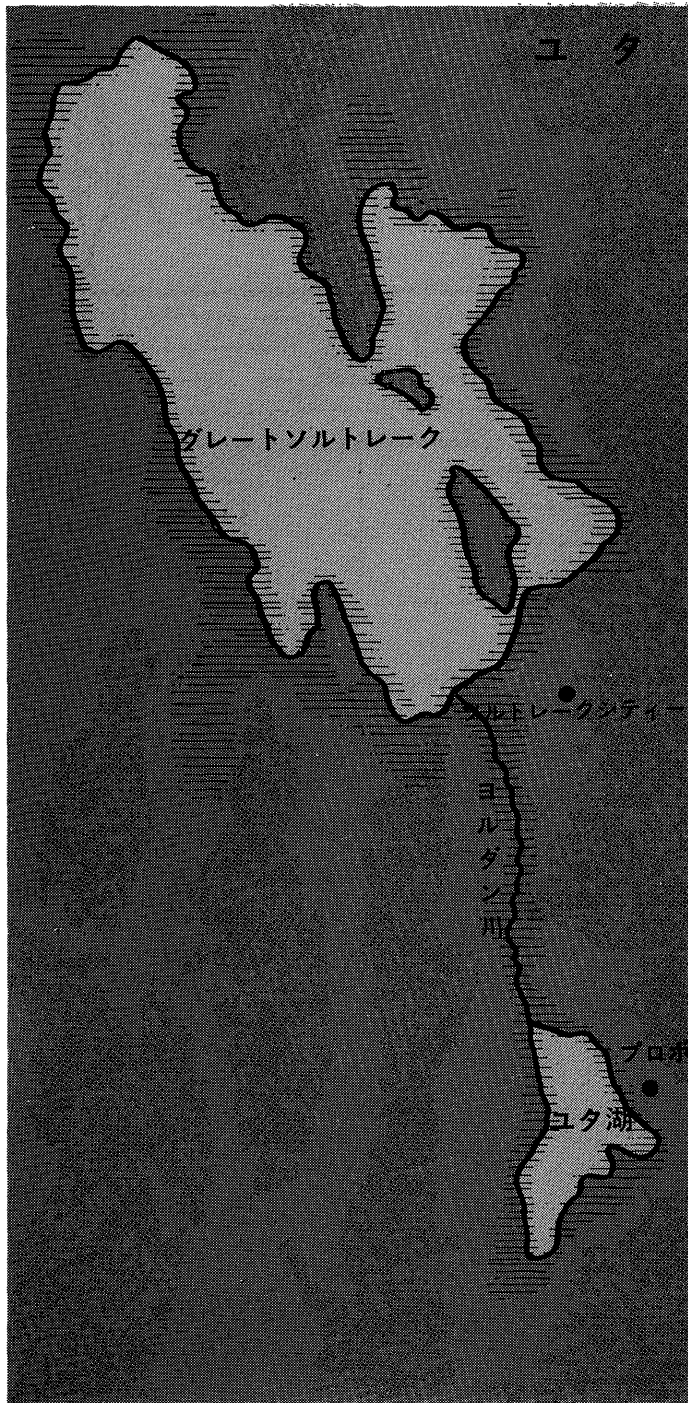
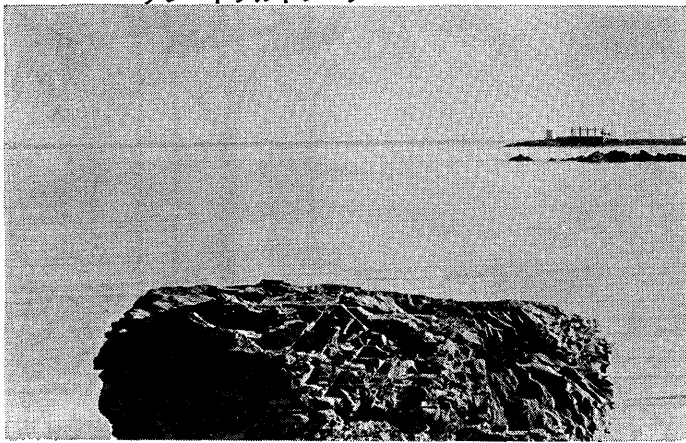
ユタ州ソルトレークシティの近くにも、これとよく似た地形が見られます。ユタ湖は大きな淡水湖で、ほとんど周囲を山に囲まれた谷の中にあります。長さ40キロ、はば13キロ、はばはガリラヤ湖と同じです。そしてユタ湖にはガリラヤ湖と同じように、たくさんの魚が住んでいます。

ユタ湖からは北へ向かって流れる川があり、これは聖地の川の名前にちなんでヨルダン川と呼ばれています。グレートソルトレークまでの長さは48キロです。

ガリラヤの海



グレートソルトレーク

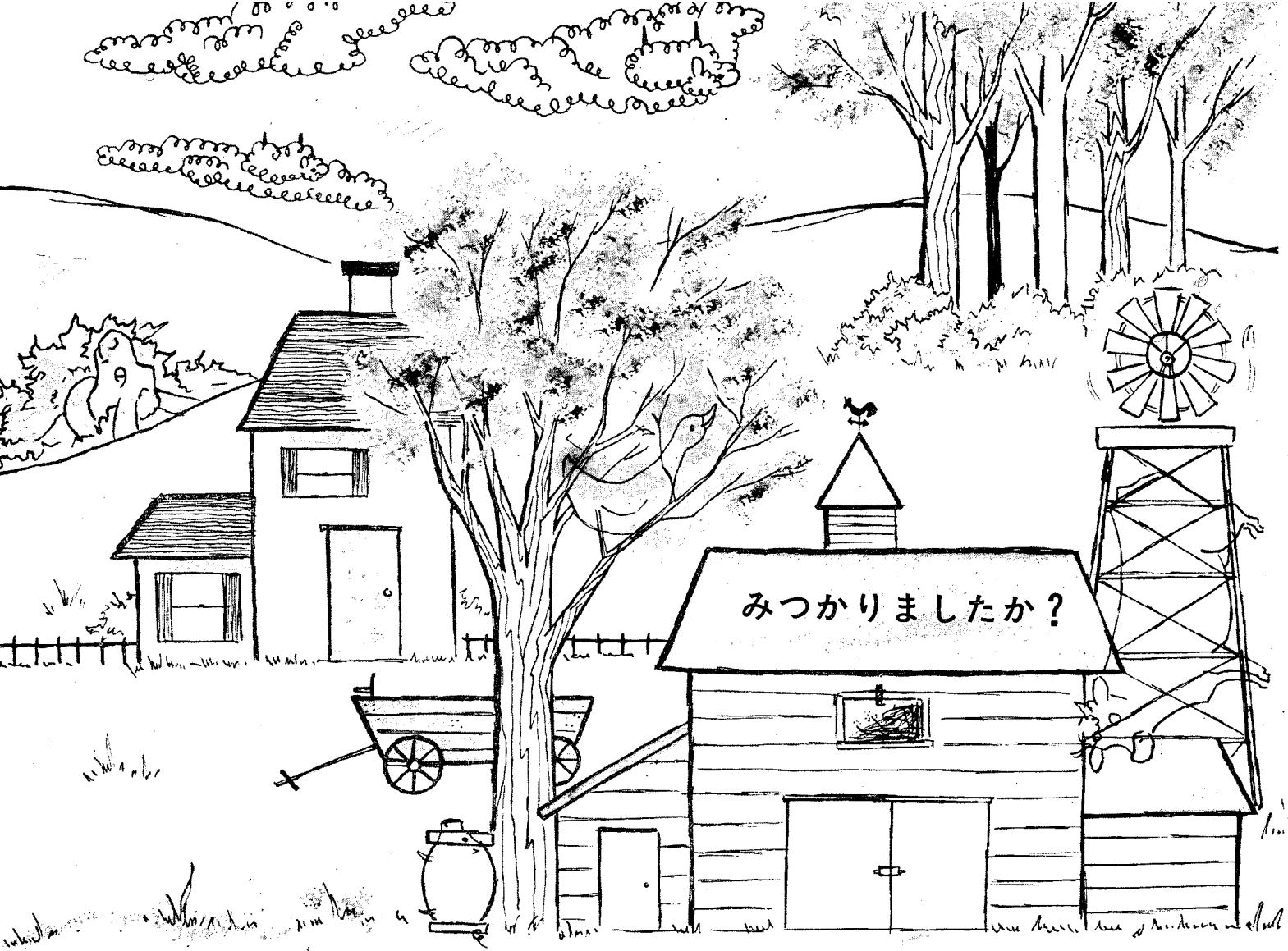


グレートソルトレークは死海よりずっと大きく、また世界の不思議のひとつにも数えられています。グレートソルトレークは長さ120キロ、はば80キロです。これに比べて死海は長さ77キロ、はば14キロちょっとしかありません。

グレートソルトレークにはヨルダン川以外にも淡水が注いでいますが、塩分は海水の4—7倍もあります。塩の量は季節によって水の量が変化するため、さまざまです。しかし毎年この湖から20万トンの塩がとれます。くみ上げた塩水を長いみぞを通してちんでん池にため、太陽の下で水分を蒸発させ、純度の高い塩を作るのです。

グレートソルトレークには島がいくつかあり、これは海かもめやかも、がん、ペリカンの大群のせい息地となっています。ある島は、毎年春になると海かもめが巣を作るので、鳥の島と呼ばれています。海かもめはユタ州の州鳥で、法律によって保護されています。昔、この鳥はモルモンにとって奇跡の鳥でした。モルモンの開拓者たちがグレートソルトレーク盆地にやってきて穀物を作ったのですが、それをイナゴの大群がおしよせて来て荒らし始めたのです。そのとき海かもめが飛んできて、イナゴを1匹残らず食べてくれたのでした。

聖地そしてユタにも淡水湖と塩湖とヨルダン川があります。そしてこのふたつの地は、主が御自身に忠実な民に奇跡を示されたところなのです。



牛、ぶた、ろば、あひる、ひつじ2頭
がかけています。

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

質 疑 応 答

「アロン神権定員会に管理の 原則はどう働きますか」



解答／
バックマン兄弟

最近あるワード部の断食証会で、執事定員会の会長が壇に立って証しました。彼は、定員会の仲間がすわっている最前列を見おろして、ワード部の執事全員に対して責任があるという思いに圧倒され、「うわぁ、ぼくほんとに君たちみんなの受持ちだなんて、とっても信じられないや」と叫びました。

この若くすばらしい定員会会長は、自分が監督を通して、定員会の会員を導くように主から召されたことや、主を代表して、定員会の中で主のみこころを行なう責任があることを、実感したのです。彼は、主が次のように言われたことの意味を、理解し始めたのでした。

「われまた誠に汝らに告ぐ、執事の職を管理する長たる者の義務は、十二人の執事を統轄しこれと共に会議を開きて彼らにその義務を教う。すなわち誓約により与えられたところに基づき互いにこれを啓発すべきものとす。」(教義と聖約 107:85)

この啓示には、定員会会長が会員をあずかる責任を果たすにあたって、ぜひとも理解し、実行しなければならないことが、3つあげられています。

1. 管理すること。これは、監督し、指示し、指導し、抑制することです。定員会会長は、定員会会員が神権の義務を全うできるように定員会を導く鍵を持っています。また定員会の助言者というだけでなく、彼も定員会を導くにあたって啓示を受ける権利を持っており、もし彼がその鍵を利用しないなら、その定員会は会長を通じて来るはずの祝福が受けられないこととなります。

2. 会員と共に会議を開くこと。ここでは、会長が各会員に愛と関心を示し、どの人とも仲良くなって、個人や定員会全体の必要をよく感じ取り、会員が自分の召しに忠実であるように導き、励まし、勧告しなくてはならないことを言っています。会長は、主が定員会会員を自分の指導下に置かれて、彼らに導きと指導が必要なときは、いつでも「彼らと共に会合を持つ」よう期待しておられることを、よく認識すべきです。

3. 会員に自分たちの義務を教えること。これは、定員会会員と同じ年頃の会長にとっては、やっかいな責任です。しかし、定員会会長がアロン神権者に神権に伴う義務を教えることは、主の命令だということを忘れてはなりません。ほかの人、たとえばアドバイザーなども義務を教えるとはいえ、それで会長の責任がなくなるわけではありません。

主が教師定員会や祭司定員会の会長にも、また長老定員会の会長にも同じことを教えられたのは興味深いと思います。その勧告を、主がいかに大切に思っておられるかということがそこからわかります。

アロン神権各定員会の会長は、ワード部アロン神権の会長であり、祭司定員会の会長にもなっている監督の指示下で働くことを忘れないで下さい。その点で、祭司定員会の指示方法はほかとは違います。祭司定員会会長は監督なので、祭司が定員会の集会を管理することはできません。祭司が集会を司会しますが、祭司たちの管理の権能と責任は監督ひとりであって、監督はその権利を他人に委任することができません。監督は祭司定員会を導くにあたって自分を手伝うリーダーをひとり選びます。その人は監督の青少年委員会の議長になってアロン神権の活動プログラムを指導するなど、ワード部の青少年プログラムに大事な役割を果たします。

定員会会長には、彼を助ける副会長がいます。賢明な会長は副会長を上手に使い、相談をして、会長会で充分に活躍してもらいます。定期的に集まって自分たちの仕事を計画、準備、評価したり、副会長に順番で定員会の集会を司会してもらったり、いっしょに会員の家を訪問したりします。会長会はひとつのチームとなって働き、定員会に模範を示し、一丸となって指導しなくてはなりません。定員会会長が副会長の使い方を知ること、また副会長が会長の使い方を知ること、これが大事です。

定員会会長に召されている人は、隣りに仕えることから大きな祝福を見だし、これからのさらに大きな召しのため

に準備するという特別な機会を与えられています。あなたがたは、指導者に利己心は禁物だということを理解するでしょう。また、末日聖徒イエス・キリスト教会が愛によって成り立っている組織であることを知るでしょう。そして、自分の責任を果たすときに、人々に対する愛と心づかいを学ぶことでしょう。

ある熱心な定員会会長は、自分の祈りまでが変わったと言ってきました。彼は、自分のためではなく、定員会会員のために祈っている自分を発見したということです。

あなたがたが責任を大切に思うとき、大人の指導者や副会長から、あるいは聖典その他の良書や自分の祈りと断食から助けを求めて、召しを立派に果たすための方法を探すことでしょう。また末日聖徒イエス・キリスト教会のどの指導者にも導かなくてはならない羊の群れがあり、それと同時に自分を導いてくれる指導者がいることを知るでしょう。それは予言者も同じことです。立派な会長は、定員会会員に従ってほしいと思うと同じに、自分の指導者を支持し、従うことでし

ょう。また、責任を委任して、会員たちが指導能力を伸ばし、働きに伴う祝福を得られるようにして、「群れ」にある人たちの進歩をはかるでしょう。

特に、自分がしもべを通じて主から召されたことを、いつも忘れないで下さい。主は、主の王国で指導の責任を持つすべての人に対して、もし最善を尽くしてつとめを果たすならば、奉仕の力を増し、証を強め、弱点を克服させ、指導下にある人々の生活を恵んで下さると約束されました。ニーファイの手本にならして下さい。彼は主から受けたむずかしい召しに、確固たる信仰をもってこたえました。

「……私は主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それではなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。……」（I ニーファイ 3：7）

ロバート・バックマン
アロン神権MIA YM会長

予言者と主の民の予任

主は、今日召されて主の民を導く人々を以前から備えておられた。



十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

スペンサー・W・キンボールが末日聖徒イエス・キリスト教会大管長、主の民に対する予言者、聖見者、啓示を受ける者、これからの時代にあって地

上の神の代弁者となるべく予任されていたと、私は信じる。彼が予言と啓示のみたまにより、このつとめに召され選ばれ、聖任されたこと、またキンボ

ール大管長が今や先頭に立って主の民を導くべきことは、私たちが証し、仕えるお方のみことでありみ旨であると、主のみたまが彼のい合わせた場所で十二使徒の一人一人に証言したことを、私は知っている。

それは主がご自身の声でこう言われたと同じである。「私のしもべハロルド・B・リー大管長は、私の命じたすべてのことに忠実かつ真実であった。あなたがたの中での彼の務めはすでに完了した。私は彼を永遠のぶどう園の別のより大いなる働きに召した。そして今、私の民を導き、私が自ら地上を統治しに訪れるあの大いなる日のために民を備える働きを続けるように、主なる私はしもべであるスペンサー・W・キンボール大管長を召す。そして、私のしもべジョセフ・スミスについて言ったと同じことを、彼に対しても言う。『……汝ら教会員は、彼が上より受くるままに汝らに与うる誠命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き、わが前に全く聖き道を履むべきなり。そは彼の言は、汝ら全き忍耐と信仰とを以て、あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

主なる神かくの如く言う。われは彼に靈感を与えて、善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。われ彼の勤勉なるを知り、また彼の祈りを聞けり。』（教義と聖約21：4—5，7）」

すでに世を去った予言者たちは信じやすく、別の環境のもとで別の民に与えられた勧告は信じて従えると思いやすいようである。しかし、主が地上に予

言者を置かれたどの時代もそうであったように、私たちの遭遇する大きな試練は、主の生ける予言者の言葉をよく聞き、今の時代に与えられる勧告と指示に従うかどうかということである。

「われらアブラハムの子と、ユダヤ人はエホバに言えり。

われらみ父に従い、ゆずりを受けんと。

されど主イエスの口より、叱責のむち飛びて、

汝ら従うべく名を連らねた者の子

アブラハムの子孫とあらば、その道を歩み、父祖の天罰の固き鎖より逃れいでたるものを。

われら聖見者モーセと古えの予言者を持てり、

かれらが言葉は金銀の宝。

されど主イエスの口より、莊嚴な声いでて、モーセに向かわばかの言葉を聞け

大いなる値の報いを得べし

モーセわが降臨とわが地上の業を告げたればなり。

われらならうべきペテロとパウロを持てりとおのれの神をあがめつつ信者は言う。

されど生者と死者との主なるお方はかく言われる。

汝の時代の予言者、かの教師たり聖見者たる者の手に

われ鍵を渡しぬと。

み父のみ旨にかなわんため、汝ら彼らに頼れと。

——ブルース・R・マッコンキー

この通り、私たちの時代に地上の神の王国、教会を管理する謙遜な人々は、古えの使徒や予言者と同じく、この末日に地上の王国を導くために神より選ばれた人々である。スペンサー・W・キンボール大管長、N・エルドン・タナー副管長、マリオン・G・ロムニー副管長のそばでほぼ毎日を過ごす私たちは、彼らが下す裁断の知恵と判断に目をみはり、彼らがかつての大管長会ペテロ、ヤコブ、ヨハネと同等の義の説教者であると悟るのである。

地上の主のみ業を導くこれらの兄弟の召しが偶然ではあり得ないと、申しあげてよろしいだろうか。主の力がそこにある。主は初めから終りまでご存知である。主は救いの計画を定め、主の永遠の福音がアダムからジョセフ・スミスまでの各神権時代に人に啓示されるよう、命じられた。そして、全能の主は、主のみ名によって働き、すべての神権時代に主の言葉を世界に伝える予言者と使徒とを選ばれる。主のみ業に働く人々を選び、予任される。彼らを時をはからって地上へ送り、み手により絶えずこの世の用意をさせ、そして、創世の以前に受けるべく予任されたその役職に召すのである。

スペンサー・W・キンボール大管長を、主の民の指導者となるべく用意され、予任され召された者の典型として、説明させていただきたいと思う。彼はまことに、信仰の家で生まれた。キンボール大管長はイサクとアブラハムから靈的資質を受けついでヤコブのよう

に、現在の使徒の管理職に備えて才能や資質を生まれつき授けられていた。

しかし出生以前には、この世での準備以上のものがある。彼はゆえあって信仰の家に生まれた。彼が光と真理と救いの牧者として民の間に立つ準備は、この世だけに限られなかった。事実、彼は地の基が据えられる以前に召され、選ばれ、予任された神の霊の子であり、神御自身が臨席されたかの前世の大会議に、私たちの眼前でもくろまれ、約束されたその使命を、彼は今こそ果たしているのである。

ジョセフ・スミスは言った。「世の人々に導きと恵みを施す召しを持つすべての者は、この世界のできる以前、天上の大会議でまさにその目的のために聖任された。」また予言者は自分についてこう語った。「私は、自分があの大会議で、実にこの役職に聖任されたのだと思う。」(*Teaching of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」[英文] P. 365)キンボール大管長は今やジョセフ・スミスの着た外套をまとい、同一の予任の律法の翼下に入ったのである。

かの会議の場にいた私たちの父アブラハムは、前世の霊の軍勢を示現に見る祝福を得た。彼はこのように告げた。「これらすべてのものの中には、高貴にして偉大なるもの多くありたり。」その霊は「善し」と言われている。(アブラハム 3 : 22) アブラハムは、永遠の父なる神がその力ある者たちの「中に立ちて」、「これらの者をわが統治者となさん」、「アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる

前に選ばれたり」と言われたのを見た。(アブラハム 3 : 23)

アブラハムがそうであるように、すべての予言者は、またそのことに関して責任の違いこそあれ、イスラエルの全家、主の地上の教会の全会員は、皆予任の祝福にあずかっている。

エレミヤに主は言われた。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」。(エレミヤ 1 : 5)

この世でメルケゼデク神権を受ける者はすべて、アルマが教えるように、「神の先見の明によって創世の前からすでに選んで備えておかれた。」なぜならば、彼らは前世で高貴にして偉大なるものだったからである。(アルマ 13 : 3)

また、パウロはこの予任の律法を選ぶの教義と呼び、それによってイスラエルの全家に、「子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も」与えられると言っている。

(ローマ 9 : 4) パウロは、忠実な教会員、すなわち「神を愛する者たち」、「ご計画に従って召された者たち」が「御子のかたち似たものと」なって「キリストと共同の相続人」となり、御父の王国で永遠の生命を得よう予任されていると述べている。(ローマ 8 : 17, 28)

彼はまた教会員について、神が「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前からキリストに

あってわたしたちを選び」、養子縁組によってイエス・キリストの子となり、この世では「罪過のゆるし」を受け、来たるべき世では永遠の栄光を受けるように予任されたと言っている。

(エペソ 1 : 7)

私たちの持つ古代、近代の聖典には、神の先見の明により、この世での特別な働きに召された人々や、イスラエルの家系に生まれ、良き羊飼いの声を聞いて地上の主の羊の群れに入る雄々しい人々への約束など、どちらも予任の律法についての記述が多い。

キリスト御自身が、予任された予言者の典型と言えよう。キリストは永遠の会議で救い主、贖い主として選ばれた。ペテロはキリストを、時の絶頂に無窮永遠の贖いをなし遂げるために来るべき御方として、「きずもしみもない小羊……キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていた(予任されていたの意)」(I ペテロ 1 : 19, 20) と語った。4千年間、すべての予言者はキリストの来臨を証し、その慈悲と愛を声高く告げた。

「肉体に宿りたもう」(I ニーファイ 11 : 18) 主の母マリヤ、イスラエルに導きと恵みを施した偉大な予言者モーセ、使命を帯びて世の終りの示現を見た黙示者ヨハネ、回復の予言者、聖見者ジョセフ・スミス、彼らは皆この世の務めに携わる何百年、何千年前から指名されていた。予任された働きは、あらかじめ知られ、計画されていたからである。

バプテスマのヨハネや古代の十二使徒やコロンブスのなすべきことは前も

ってすべて知られ、準備が整えられた。しかしこれらは皆、単なる青写真である。主のみ業はすべてあらかじめ計画、準備されており、そのみ業に召され、選ばれた人々はまず前世で、それからなお誠実かつ忠実であるならば再度この地上で、主から任命を受けるからである。

では、これからという時代に主を代表して王国を管理すべく主に選ばれた者、すなわちこの教会の大管長はどうであろうか。彼は、実際忠実な先祖の末と言うにはあまりあるものである。彼は事実神の息子であり、全能者の霊の子である。彼は永遠の御父と共に住み、その面を見、声を聞き、とりわけ重要なことにはそのみ言葉を信じ、その律法に従ったのである。

従順により、一致により、自己の義しさによって、選ばれし愛子のあとを継ぐべく選ばれたゆえに、スペンサー・W・キンボールは前世において高貴にして偉大であった。彼は他のすべての才能にまさって霊性の賜を伸ばした。信じる才、真理を受け入れる才、正義を求める才を。

彼は、「神の如き者」（アブラハム 3：24）主なるエホバを知り、礼拝した。彼はアダムとエノクの友であった。ノアやアブラハムから助言を受け、イザヤやニーファイと会合した。彼は、天の王国でジョセフ・スミスやブリガム・ヤングと共に仕えた。

前世は遠く離れた神秘的な場所ではない。私たちは、慣れ親しんだ私たちの父の永遠の家を離れて、わずか数十年しか経っていない。私たちは皆、永遠の

霊が土の幕屋に住まいを得る以前に、主のみ業のため共に働いた友や仲間たちと薄い幕によって隔てられているに過ぎないのである。

私たちがかの地での交わりを思い出さないように幕が引かれたことは事実である。しかし私たちは、永遠の御父があらゆる力、あらゆる勢力、あらゆる支配、あらゆる真理を持ち、自らも家族の単位の中に住んでおられることを知っている。また私たちが、神の形にかたどって造られ、神のようになる力と能力を授けられた神の子供であることを知っている。また、主が私たちに自由意志を与え、従順によって永遠の生命が得られる律法を定められたこと、かの地で私たちには友や仲間がいたこと、さらに、私たちは最も完全な教育機構の中で教えられ、訓練されたこと、主の永遠の律法に従順であったため数え切れないほどに多種多様な才能を伸ばしたことを知っている。

そしてそこから、予任の教義が出てくる。私たちは地上に来るときに、前世で律法に従順であったために得た才能や能力を携えて来る。モーツアルトは音楽的才能を持って生まれたために、8歳でソナタを作曲した。メルケゼデクは、「子供の時に神をおそれ、獅子の口をとどめ、猛火を消した」（靈感訳創世14：26）ほどの信仰と霊的能力を備えて、この世に生まれました。他方、カインはルシフェルに似て、初めからいつわり者であり、この世では、「汝は『滅亡』と呼ばれん、汝もまたこの世の前より在りたればなり」。（モーセ5：24）と言われたのである。

これが予任の教義である。選びの教義である。主が地上で特定の人々を選び、愛されたことのわけはこれであり、主が「わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。わたしは、彼らに永遠の命を与える。……」（ヨハネ10：27, 28）と言われたことのわけはこれである。このすばらしい真理を知った私たちには、キリストのくびきを負い、戒めを守り、喜ばれることをして主に従うという責任が、他のどの民にもまして、重くかかってくるのである。もし私たちが主を愛し、主に仕えようとするならば、主がみ言葉を教えようと遣わされる使徒や予言者の言葉に心を向けるであろう。

現代の世の中が必要とするのは、主が予言者を送ってみ旨とみところを啓示することではない。主はすでにそれをなされた。私たちには予言者があり、私たちは靈感のみたまを持つ大勢の人によって導かれている。現代が実に必要とするのは、人が聞く耳を持ち、予言者の口から出る言葉に心を留めることである。

イスラエルに予言者のあることを、神に感謝し、ほめまつらん。

聞く耳を持ち、主の予言者の声に心を留めるよう、願いたてまつらん。

神がみたまを私たちに注ぎたまひ、それにより、大いなる末日の業の神性と真実とを知り得ることを、神に感謝したてまつらん。その永遠の真理をイエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

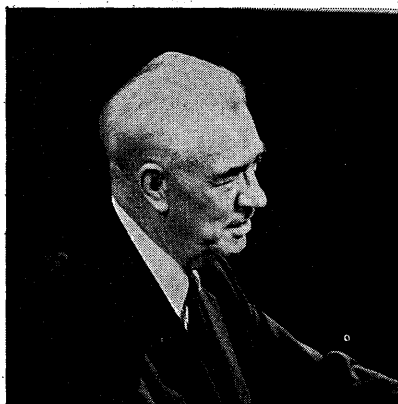
1974年4月6日日曜日午後の説教

誠に然り「アーメン」

キンボール大管長は主の代弁者である

マーク・E・ピーターセン

十二使徒評議員会会員



今大会において、私たちは正式に末日聖徒イエス・キリスト教会の新しい大管長をその職に任じた。まさに重要な出来事である。

これは、144年にわたる教会歴史の中でもわずかに12回行なわれたにすぎない。今朝タバナクルで開かれた聖会で、スペンサー・W・キンボール大管長は教会の大管長、主の予言者、聖見者、啓示を受ける者として支持の挙手により受け入れられた。

支持の挙手は満場一致でなされた。

そこにはまた聖霊の確認があり、この壮大なタバナクルに集まっていた誰もがその聖なる力を感じた。ラジオやテレビで聖会の進行状態を見聞きしていた人もまた同様の経験をしたことであろう。そしてモーセの時代の如く、「民はみなアーメンと言」ったのである。(申命記27章参照)

何とすばらしい人物が選ばれたことか。この数年十二使徒評議会を導き、またハロルド・B・リー大管長の死後今大会に至るまでの間、十二使徒評議員会の決議によって教会の大管長としての任を果たしてきたその人は、今やここに神の命じられた霊的指導者、主のみ言葉と主のみこころを釈き示す者として教会員の支持の挙手を受けるに至ったのである。

彼はこの高貴な役職を非常に謙虚な面接で受け入れた。謙遜な人で僭越な所はないが、彼は「堅固なやぐら」(詩篇61:3)であり、何でも積極的に行ない、先見の明を備えた人、そしてあらゆる点で行動の人である。

30有余年にわたる十二使徒としての任務を通じて、彼の示した驚くべき精力、み業に傾ける並々ならぬ熱意、無私の態度、神の王国建設に寄与して祭壇の前に自己をすべて捧げたその決意は、彼を教会全体に知らしめる所以となっている。

彼の献身は尽きることを知らない。彼はまさしく聖別された主イエス・キリストのしもべである。彼の健康は奇跡的な回復を遂げ、この偉大なる任務を遂行することを可能にした。このように彼が癒されたことは、彼の召しが神からのものであることを示す明白な証拠であり、神のみ業である。

主から授けられた奇しき力を行使するに当たって、彼は決してその力の根



聖会で支持の挙手をする十二使徒評議員会



七十人最高評議員会による支持の挙手

源を忘れることがなく、主のみこころが何であるかを知り、そのみこころを実行しようと常に努める。

キンボール大管長は、その非常な熱意と精力もさることながら、彼は親切で哀れみ深く柔和であって、人を助けたいという気持にあふれた、完璧なキリスト教徒である。そして人に新たな光を投げかけ、新たな希望を与え、人が主の道に立ち帰ることができるよう著わした書物を通して、また数多くの道を踏み迷った人々一人一人の手を取り、救いの道へと導いてきた。

正すことが必要とされ、彼自身その必要性を認めたときは、常に愛と親切に満ち、温かい同情の手を差し伸べ、しかも正義に堅く立ちながら、人々を

正してきたのだった。

困難な仕事に直面したとき、特に今度の責任は最も困難なものであろうが、彼は決して責任から逃避せず、信仰と祈りと彼の高貴な人格に備わる力のすべてをもって立ち向かっていく人である。その結果、み業は止まることなくしかも適切に行なわれるのである。

彼は常に自分の力の限界を気に留めながらも、この業が神のみ業であり、主は謙遜な人々を用いて主の目的を成就されるということを知っている。

キンボール大管長は、ニーファイの言葉に確固たる信仰を抱いている。「……私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それではなくては、

主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである」(I ニーファイ 3 : 7) この聖句は彼の信仰の拠所となっており、成功の秘訣となっているのである。

主の計画はこれまで同様、今後も進行するであろう。なぜなら全能の神は、日々スペンサー・W・キンボール大管長を導き、彼を通して働かれるからである。主のみ業は決して衰微せず、他の民に渡されることもない。

今日、教会員が全員一致で新しい大管長を支持したとき、彼らは大管長に従うという誓約をするに当たって非常な責任を引き受けたばかりか、回復された主イエス・キリストの福音のきわめて大切な原則を擁護したのである。

彼らは、神とタバナクルをはじめラジオ、テレビの放送網を通じて集った数十万に達する証人の前で、支持の挙手をするにより誓約を交わしたのである。

大管長を支持するとき、私たちは彼の指示に従うことに同意する。彼は今日の主の代弁者であり、これには非常に重要な意味がある。予言者ジョセフ・スミスの時代にこの問題が持ち上がったとき、主は教会の指導者について次のように言われた。

「……また聖霊によりて感ずるままに語るべきことは……

およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり、主の意となり、主の精神となり、主の言となり、主の声となり、世を救いに導く神の能力となるべし。)(教義と聖約68 : 3, 4)

教会員として新しい大管長に支持の挙手することによって、私たちは彼が与える永遠の生命の言葉に努めて留意するという神聖な誓約に身を委ねたことになる。

主は近代の聖典の中でこう言っておられる。「汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。)(教義と聖約84 : 44)



支持の挙手をする大管長会

では、どのようにしてその言を受け
るのだろうか。それは、むろん神の予
言者を通じてである。

世の始めから神はその方法をとって
こられた。アモスへの啓示で主は言わ
れた。「まことに主なる神はそのしも
べである預言者にその隠れた事を示さ
ないでは、何事をもなされない。」(ア
モス3：7)

これは旧約聖書の中で主が示された
方法であったが、新約聖書の時代も同
様であり、また今日も然りである。

144年前教会が設立されたとき、主
は原則を回復されることによってこの
意味を明らかにされ、この地上におけ
る主の教会の指導者が主の代弁者であ
って、人を自分に従わせようとして自
己推薦をするような人ではないと言わ
れた。

1830年4月6日、主は新しく任命さ
れた教会の大管長について、大管長は
また主の代弁者であると告げられた。

その後、主はジョセフ・スミスを予
言者、聖見者、啓示を受ける者としても
指名された。このようにして、主は次の
ように教会員を命じられたのである。

「この故に汝ら教会員は、彼が上よ
り受くるままに汝らに与うる誠命と彼
の言とを皆心にとめてよく聞き、わが
前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は、汝ら全き忍耐と信仰
とを以て、あたかもわが口より聞か
が如くにこれを受け入るべきなればなり。」(教義と聖約21：4、5)

続けて、主はこの命に従う者に大い
なる約束を与えて言われた。

「これらのことを為さば、地獄の門
も汝らに打勝たざるべし。而して、誠
に主なる神は汝らの前より暗闇の力を
追い払い、汝らの為と神の御名の栄光
のためにもろもろの天をも震い動かし
めん。」(教義と聖約21：6)

一体この約束以外に何を求めること
があろうか。この聖句は、大切な原則、
すなわち私たちが今日の支持の挙手か
ら学ばなければならないもうひとつの

訓戒を思い起こさせるものである。そ
れは、この地上におけるキリストの教
会の長たる者は一時代にただひとり存
在し、彼は今日のキンボール大管長と
全く同様に選ばれ支持されなければな
らないということである。だれもこの
召しを自分で得ることはできない。大
管長はアロンの場合のように、神の召
しを受けなければならないのである。
(ヘブル5：4参照)

主は任命を秘密にすることは許して
おられない。正当な手続きを踏むため
万事は公に、しかも人々の支持の挙手
によって行なわれる。主は言われた。
「……およそ誰か権威ある者より聖職
に按手任命され、またその者の権威を
有てることと、教会の長たる者たちよ
り正式の按手聖任を受けたることとが
教会員の知るところにあらざれば、何
人といえどもわが福音を宣べんため
に出て行くこと、または教会を創立す
ることを許されざるべし。」(教義と聖約
42：11)

主は続けて言っておられる。「すべ
てのことは……各教会各々の全体一
致によりて為さざるべからず。」これは
衆知ということ、また支持の挙手によ
るということを表わしている。

さらに主は、「正式に組織せられた
るわが教会支部のある所にありては、
何人といえどもその教会支部の支持の
挙手によらずしてはわが教会内のいか
なる職にも按手聖任さるる能わず。」
(教義と聖約20：65)と言われた。

また、次のようにも言われた。「わ
れ今汝らに一つの命令を与う。すなわ
ち汝ら須らくこの職を全部充たして
わがその名を挙げたる人々をわが一般
大会において承認すべし。然らずんば
これを否認すべきなり。」(教義と聖約
124：144)

この原則は、あらゆる種類の熱狂家
や偽りの教師、指導者を排除するもの
である。そして、教会にあって指示す
る者の声は明らかに唯一つであり、そ
れは啓示により、また教会の総大会で



聖会のときタバナクルの外で支持の挙手をする会員たち

人々の支持の挙手を受け正式に選ばれた予言者、聖見者、啓示を受ける者の声であるということに主の民の注意を喚起するものである。

今日、その人はスペンサー・W・キンボールである。

ジョン・テイラー大管長は、大管長を支持するときの進め方について次のように述べている。その方法はまさに今日、私たちがとったものである。「これは、古代イスラエルの民の間で行なわれていたと同様、主がシオンの民に制定された規範である。……これは神のみ声であり、民の声である。」(*The Gospel Kingdom*「福音の王国」[英文] P. 143)

ブリガム・ヤング大管長はこの件について討議した際、さらに次のように語った。「(主)はひとりの予言者の口を通じてのみそのみこころを民にお知らせになる。主が民に啓示を与え、新しい教義を示し、あるいは懲罰を与えようとするとき、主はその職に召され按手任命された者を通じて行なわれる。」(*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」[英文] P. 212) まさしくその人こそ教会の大管長である。

ブリガム・ヤングはさらに述べている。「主なる全能の神がこの教会を導いておられる。あなたがたが自らの義務を遂行しているならば、神は決してあなたがたを迷いには導かれないであろう。」(*「ブリガム・ヤング説教集」* P. 212)

ヒーバー・J・グラント大管長は述べている。「天父の望んでおられない人がイエス・キリスト教会の長になるのではないだろうかと思わずらう必要はない。天父の望んでおられる人以外にイエス・キリスト教会の長に就く人はいないからである。」(*G・ホーマー・ダーハム編 Gospel Standards*「福音の標準」[英文]、インプールブメント・エラ、1969、P. 68)

さて、キンボール大管長はどのよう

な権能を持っているのだろうか。教会の大管長である彼は、この最後の神権時代、福音が回復されるにあたって天使により予言者ジョセフ・スミスに与えられたあらゆる鍵と権能を有している。大管長は権威ある者の按手によりこれらの権能を授けられた。ここで私は繰り返し申し上げたい。キンボール大管長は、以前あらゆる鍵と権能を持ち、キンボール大管長にそれらを与える権威を有していた人々の按手によってこれらすべての権能を授かったのである。

教会の歴代大管長はいずれも、すべての鍵と権能を有してきた。だれもそれらなくして働くことはできない。また教会も存続し得ないのである。

もし予言者ジョセフ・スミスがこれらの権能の鍵を墓に携え行つたのだとすれば、今日どうして私たちはこの業を遂行できようか。鍵なくして主のみ業は進まないのである。ジョセフ・スミスに与えられたすべての鍵と権能は教会指導者の手で絶えることなく保持されねばならなかった。

もしジョセフが死者の救いの鍵を有したまま世を去ったとすれば、私たちはどうして神殿事業を行なうことができるだろうか。

権威を持たずにどうしてあらゆる国民、部族、国語、民族に福音を宣傳することができようか。

また、もし開拓者たちが神の権能を有していなかったとすれば、予言者イザヤの予言を成就すべくなぜこの山の頂に来て、この地に教会の本部を設置したのだろうか。

救い主の再降臨に先立ち、やがて世界中から主の民が集合するであろう。イスラエル集合の鍵は、この鍵を保持しそれをジョセフ・スミスに託した予言者モーセを通して私たちに伝えられたものであるが、主の民の集合もこの鍵なくしてどうして行なわれ得るだろうか。また、神の権能を持たずに世界各地に教会のステーク部を設立するこ

とができるだろうか。

私たちは、天使によって予言者ジョセフ・スミスに与えられた種々の権能が教会にあり、依然としてこの教会に存在していることが容易に理解できる。

神の権能は常にひとりの人、すなわち予言者、聖見者、啓示を受ける者である教会の大管長に委ねられているのである。

これに代わる他のいかなる方法も存在しない。なぜならこれは主の方法であり、主が御自分の業を指示し、導かれる道だからである。

まさしくアモスの言葉は真実である。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス 3 : 7)

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は次のように語っている。「イスラエルの長老たち、並びに神の聖徒の皆さん、私はあなたがたが召しの尊厳と神聖さに奮い立ち、自らの職務と誓約を完全に実証するようお勧めしたい。あなたがたの働きによって権威を、鍵を、そして神権を支持しなさい。神の眼、天使の眼、人の眼はあなたがたの上に注がれており、業をなし終えたとき、あなたがたは正当な報いを受けるであろう。」(マシアス・F・カウリー編、*Wilford Woodruff*「ウィルフォード・ウッドラフ」、*デゼレトニューズ* [英文] 1909、P. 657)

私は贖い主が生きておられることを知っている。贖い主は親しく、今日私がこれまでお話してきたことが真実であることを私に知らせて下さった。天父なる神は生きておられる。この教会は生ける神の教会であり、救い主なるイエスがみ業を導いておられる。キンボール大管長はまさしく主の予言者であられる。この聖なる証のすべてを心からへりくだって、いと高き主イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

正義と憐れみ

「主は、愛する者を、戒められるからである」

十二使徒評議員会補助

ジェームス・E・カリモア



今日私は皆様と共に正義と憐れみの原則について考えてみたいと思う。この話を始めるにあたり、私はソロモンの箴言を冒頭に読み、これをテーマとしたい。

「わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。その戒めをきらってはいない。」

主は、愛する者を、戒められるからである。あたかも父がその愛する子を

戒めるように。」(箴言 3 : 11—12)

主は教会の初期の時代、なすべきことを怠っていたある兄弟たちに、注意を促された。また予言者ジョセフにも、主はこのような述べておられる。「われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり。」

されど、われ誠にわが僕フレデリック・ジー・ウィリヤムスに告ぐ。……汝はいまだにわが誠命に従いて汝の子供たちに光明と真理を教え居らず、さればかの悪魔はいまだに汝を支配し居れり、……

われ誠に、わが僕シドニー・リグドンに告ぐ、汝はその子供たちに就きいまだにわが誠命を守らざるところあり。故に、まず汝の家を整うべし。

わが僕ニューエル・ケイ・ホイットニーもまた必ず懲しめを受け、その家族を整うべきものなり。その家族の者共をして、家に在りて必ず今一層勤勉に事にかかわらしめ、また常に祈りを

なさしむべし。然らざれば、彼ら今居る所より立ちのかされん。」(教義と聖約 93 : 40—42, 44, 50)

予言者ジョセフが不承不承、マーテン・ハリスにモルモン経の原稿の一部を渡し、それらがなくなったとき、主は従順でない予言者を叱責して次のように言われた。「神の業、計画、目的が破れ、また水泡に帰するは共に有り得べからず。」

神は曲れる道を歩まず、また右手にも左手にも曲らず、また宣べし事と違ふところなし。故に、神の道は直くしてそのふむ道は永遠にかわらぬ一すじなり。

破るものは神の業にあらずして人間の業なるを決して忘るべからず。

そは、たとえある人多くの啓示を受け多くの大いなる業をなすべき能力を有つとも、その人己が力を自慢し神の助言を、無にして己が意志と肉体の欲とに従わば、必ず墮落して正義の神の怒りを彼の身に招かざるべからざればなり。

見よ、汝、神よりも人をおそれしは悪しきことなり。人々神の助言を無ししその言を軽んずとも、汝はよく忠信ならざるべからざりき。さらば神はその腕を伸し、悪魔のすべての火矢より汝を助け、なやみの時ことごとく汝と共に在りしならん。

されど忘るるなかれ、神はいつくしみ深し。この故に汝わが与えたる誠命に背ける行為を悔い改めよ。然らば汝はなお選ばれたる者なるを失わず再び神の業に召さるるなり。」(教義と聖約 3 : 1—4, 7—8, 10)

赦しを構成する基本的な概念のひとつに、真心から悔い改めて、正義を満たすということがある。そうしてはじめて赦しがもたらされ得るのである。

「罪を認める許可証などあろうはずはない。あるのはけん責に伴う憐れみだけである」と予言者ジョセフは述べている。(Documentary History of the Church)「教会歴史記録」5巻[英文]

P. 24)

またキンボール大管長はこのように語っている。「自分の罪を悔い改めずに、ただひたすら主の憐れみにのみすがろうとする人が大勢いる。……主は憐れみによって正義を和らげるが、憐れみをもって正義に代えるようなことは決してされない。憐れみは正義を押しつけることができない。神は憐れみ深いお方であるが、同時に正義のお方でもある。」(スペンサー・W・キンボール *The Miracle of Forgiveness* 「赦しの奇跡」〔英文〕P. 358)

正義が永続することについて、神の律法は、「神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。」(ガラテヤ 6:7)と明確に述べている。

イエス・キリストの福音は人々に救いと恵みをもたらす律法を基としている。そして、主が私たちに与えられるすべての律法には、それを破った際の罰が付随している。予言者アルマは次のようにこの点を明らかにしている。「人が罪を犯さなかったならば、どうして悔い改めることができようか。律法がなかったならばどうして罪を犯すことができようか。罰を定めなかったならば、どうして律法があり得ようか。」(アルマ: 42: 17)

スティーブン・L・リチャーズ副管長は、「救い主は、律法を廃するためでなく、律法を成就するために降臨したことを宣言された。しかし、律法に関して、主は律法の執行を和らげ、罪を犯した者に悔い改めによって赦しを得る希望と励ましを与えるため、憐れみの原則をももたらされたのである」と述べている。(「大会報告」1954年4月〔英文〕P. 11)

教会内外の人々が救いを得、尊敬を得るには、教会管理について神より与えられた律法を支持しなければならない。教会の監督は、民の判士であり、副監督と共に、管轄内で起きた重大な背罪を裁く権限を与えられている。そ

の他の審理については、スTEEキ部長の指示のもとに高等評議員会法廷で行なわれる。これらの判士は、教会の律法に違背したすべての審理を、憐れみと正義に基いて行なうよう求められている。

神権指導者が見極め、背罪者が悟る上で、最もむずかしい問題に、以下の事柄があることを私は承知している。すなわち、いつ悔改めがその実を結ぶのか。いつ、正義の要求が満たされるのか。いつ、憐れみの原則が及ぼされるのか。私はこれらについてアルマの言葉ほど、はっきりした解答はないと考えている。

「ごらん、これによって正義はその一切の要求を満たすことができ、憐みを受けるに足る一切の人々に憐みが及ぶ。それであるから、真心から悔い改める者のほかに誰も救われることができない。

お前は憐みが正義の働きを奪うことができると思うか。私は自分で答えよう。いや、少しも奪うことができない。もしそうでないならば神は神たる資格がなくなるのである。」(アルマ42: 24, 25)

このように、重大な背罪を犯した場合には、適切な行動をとる必要があることが論理的に説明されている。教会を清浄化し、個人が完全に悔い改めることができるように援助する必要があるのである。

リー大管長は1972年に教会幹部に向かって次のように述べている。「さてこれは罪を犯した者に私たちが背を向けるという意味ではない。…私たちはそのようなにはしない。そのようにしようとしてはならないのである。父親のごとく、時には叱り、罰を与え、そののち、彼らに愛を示すべきである。これが主の教えであり、私たちは愛と親切の気持をもってこれを行なわなければならない。大きな罪を犯した人のうちある者は自らを正すことができず、主のみたまを失ない、サタンに打

ちのめされるまで悔い改めることができない状態にあると私は考えている。」

(神権管理会において、1972年3月1日〔英文〕P. 12)

スティーブン・L・リチャーズ副管長はかつて次のように述べた。「この義務を見すごしにし、違背した者を寛大に見のがし、ごまかして、一体教会にとってどんな良いことがあり、過ちを犯した人に実際どんな利益があるというのだろうか。裁きを任せられた判士はこのようにして人々を悔い改めと赦しの道を歩ませることができるといえるのだろうか。」(「大会報告」1954年4月, P. 11)

主の律法を破った人の多くは、それぞれ教会法廷に召喚され、その背罪に対して適切な判決を下されるとき、不条理な扱いを受けたと考える。教会員を守護し、重大な背罪に判決を下す責任のある神権指導者の多くは、法廷の召喚や判決を遅らせ、罪を犯したのをそのまま赦されるような立場に置こうとしている。適切な行動をとらずに親切と考えていることが、実は最も不親切なことなのである。

リー大管長は述べている。「私たちは、悔い改めない罪人に一見慈悲と思われるものを与え、真の悔い改めの基本となる正義を奪い取るようなことになってはならないのである。」(「堅固な家庭」1973年, P. 5)

では、どのように赦しがもたらされるのだろうか。いつ悔改めが認められるのだろうか。

聖典で「救を得させる悔改めに導く」といわれている神のみこころにそった本当の悲しみが、悔改めの第一歩である。(Ⅱコリント 7: 10), そして、神のみこころにそった悲しみのあとには、罪の告白が来る。これは、悪行を自ら認めることによってこうむった苦しみから逃れたいと思う、心からの願いから出る。自らの謙遜と、罪を償う決意を表わすために告白が必要なのである。

ではだれに告白すべきなのか。リチャーズ副管長の言葉を引用しよう。「言うまでもなく、主の律法が破られたのだから、主に対してである。そして苦しめた人に対してである。その際、もし必要ならば相応の償いをしなければならない。そして次に、主の代表者イスラエルの判士として主より任じられた人、すなわち、罪を犯した人が生活し、王国の会員権を有する教会の管理権を持つ主の代表者に対してである。」（「大会報告」1954年4月、P. 11, 12）

告白に関連した事柄に、観察もしくは実証がある。主はこう述べておられる。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨てなければ、その悔い改めたことは

己を治め自己を信頼できるようになっているかどうかを見極めさせることができる。第二に、判士たちは、その人の悔い改めが真正のものかどうか、再び信頼を得るに足る人物になっているかどうかを、正確に評価することができる。」（「大会報告」1954年4月、P. 12）

確かに、「主は、愛する者を、戒められるからである。あたかも父がその愛する子を戒めるように。」（箴言3：12）
「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

もしイエス・キリストの贖罪がなかったならば、人は赦しを得ることがな

人に要求して律法をきびしく行い、律法はこの者に罰を与える。もしそうでなければ、正義の働きは空しくなり、神は神たる資格がなくなるのである。

しかし神は神たる資格を失いたまわずに憐みは悔改めをする人々に及ぶ。このような憐みは身代りの贖罪が生ずるものであって、身代りの贖罪によって死者の復活が起り、死者の復活によって人は神の御前に復ることができ。このようにして、人は律法と正義とにより、それぞれの行いに従って裁判されるために、元の通りに復されて神の御前に行くのである。

ごらん、これによって正義はその一切の要求を満すことができ、憐みを受けるに足る一切の人々に憐みが及ぶ。それであるから、真心から悔い改める者のほかには誰も救われることができない。

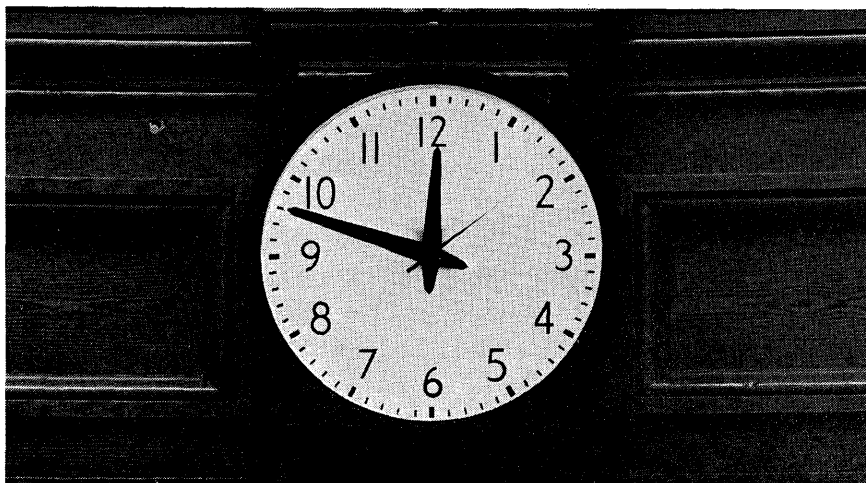
お前は憐みが正義の働きを奪うことができると思うか。私は自分で答えよう。いや、少しも奪うことができない。もしそうでないならば神は神たる資格がなくなるのである。」（アルマ42：22—25）

予言者アルマはアミュレクの手紙を説明した際、次のように述べている。「……汝らもし悔い改めてその心をかたくなにせずば、われはわが生む独子によりて汝らを憐むべし。

よりて悔い改めてその心をかたくなにせざる者は、わが生む独子によりて罪の赦しを得ざる憐みを求むる権利を受く。かかる者はわが安息に入ることを得。」（アルマ12：33, 34）

願わくは、私たちが福音のもたらす恵みを享受できるように。この偉大な業が神の業であることを証し、イエス・キリストのみ名によって申し上げるアーメン。

1974年4月5日金曜日午後の説教



タバナクルの時計

これによりて知るを得べし。」（教義と聖約58：43）

判士は正しい悔い改めを行なっていることをどのようにして知ることができるだろうか。悔い改めを実践している人でも、耐えきれずにまた罪を犯すこともあるかもしれない。だが、リチャーズ副管長の言葉を借りればこうである。「赦しを求めている者に、一定の試しの期間を経過させるべきである。この試しあるいは観察にはふたつの目的がある。第一は、罪を犯した人は、なおも襲いかかる誘惑の中にあっても、自

己を治め自己を信頼できるようになっているかどうかを見極めさせることができる。第二に、判士たちは、その人の悔い改めが真正のものかどうか、再び信頼を得るに足る人物になっているかどうかを、正確に評価することができる。」（「大会報告」1954年4月、P. 12）

確かに、「主は、愛する者を、戒められるからである。あたかも父がその愛する子を戒めるように。」（箴言3：12）
「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

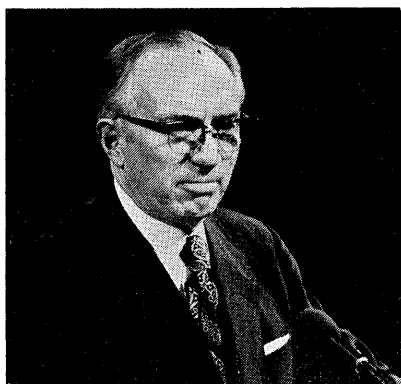
もしイエス・キリストの贖罪がなかったならば、人は赦しを得ることがない。イエスは私たちが悔い改めることを条件に私たちの罪をその身に引き受けて下さった。私たちは、たとえ憐れみを受けても、正義を満たさねばならない。主は罪のうちにいる私たちを救うことができないからである。

永遠に続く結婚

神は日の光栄の結婚より、
義人に永遠の愛と永遠の家
族関係を約束された。

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー



愛する兄弟姉妹、主のみわざのため日本の北から南まで何千キロを、共に旅して歩いた友人の渡辺驩兄弟が捧げた開会の祈りを、私は感謝している。また、ブリガム・ヤング大学の神権者のコーラスを聞いて、靈感を受けた。

彼らの声には、心を打つ美しい何かがある。聖なるみたまが私を導いて下さるならば、私の席の後方にすわる彼らにも、私の言葉を捧げたいと思う。そして同時に、全教会の若人たちに語

りたい。

この地では、季節は「若者の空想が愛の思いに向かう」（アルフレッド・ロード・テニスン「ロックスリー・ホール」）春である。そして今は4月、若者と乙女が6月の結婚を夢みるときである。

初めに、ふたつの経験談をさせていただこう。

ひとつはつい先頃、建造あらたなワシントン神殿での出来事である。その折り、大勢の新聞記者がつめかけていた。他の教会の建物と概念や目的が違い、神聖な内部に入ることのできる人も異なっているこの美しい建物に、彼らは好奇心を抱いていた。

建物が主の宮居として奉献されてからは資格ある教会員しか中に入れないが、奉献しないうちは1カ月ないし1カ月半の間、内部全体をだれでも見学

できること、また、私たちは神殿を世間の目から隠すつもりはないが、神殿が奉献されたあとは非常に神聖なものと考えてるので、清い生活と教会の標準をきちんと守っていることが神殿に入るための資格になると、説明した。

私たちは神殿を建てる目的について話し、私は特に、思慮深い男女の心に訴えるはずの永遠の結婚という目的を強調した。その時に、1958年のロンドン神殿公開日のある経験を思い返したものである。

その折り、興味を抱いた熱心な人々が建物に入ろうとして何千人も長蛇の列を作っていた。交通整理にあたった警官が、英国人がこんなにして教会へ入りたがっているのを見るのは初めてだと語った。

建物の見学者は最後にまとめて質問するようになっていた。私は夜だけ、宣教師と一緒にあって質問者と話をした。ある若夫婦が神殿の正面階段を降りてきたときに、何かおわかりにならないことはありませんかと尋ねると、女性が率直に答えた。「ええ、ある部屋で『永遠の結婚』と、ガイドの方が説明していましたが、それはどういうことですか。」そこで、私たちは門の近くのかしの大木の下のベンチに腰かけた。指にはめられた結婚指輪で彼らは夫婦だとわかり、握りあった手は互いの愛情のほどを示していた。

「さて、お尋ねの質問ですが、」と私は切り出した。「あなたがたは土地の教会で結婚されたのですね。」

「はい、ほんの3カ月前です。」彼女は答えた。

「牧師さんの司式のとき、同時に離

婚も宣告されたのを御存知でしたか。」

「どういことでしょう。」彼女はすぐに聞き返してきた。

「あなたは命が永遠だと信じておいでですね。」

「はい、もちろんです」と、彼女は答えた。

私は続けて言った。「永遠の愛なしに永遠の命が考えられますか。おふたりとも、お互いに別れ別れになった永遠の幸福を想像できますか。」

すると即座に「いいえ」という答えが返ってきた。

「牧師の方はあなたがたの結婚式で何とおっしゃったでしょうか。はっきりと覚えていませんが、こういうことを言われたはずです。『病めるとき、健康のときに、富めるとき、貧しいときに、良いとき、悪いときに、命のあらん限り』と。牧師さんは自分の権能の範囲で司式しました。死がふたりをわかちます。もしあなたがたが質問したら、牧師さんは死んでしまえば結婚も家族も存在しないとはっきり言われたことでしょう。」

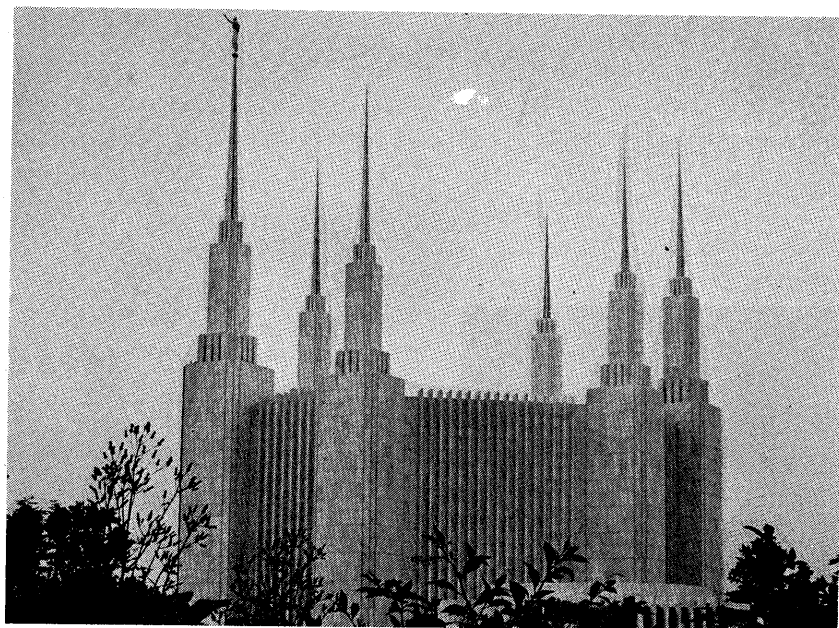
「しかし、私たちの御父は子供たちを愛して、子供に一番良いようにとお望みですから、人間関係のうちで最も神聖で崇高なこの家族関係を、ある情況のもとで続くようにはからって下さいました。」

救い主と使徒たちの感動的な言葉のやりとりの中で、ペテロが『あなたこそ、生ける神の子キリストです』と言うと、主は『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である』と答えら

れましたが、主はそれからペテロや弟子たちに向かって、こうおっしゃっています。『わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう』

主がそのすばらしい権能をお与えになったとき、使徒たちは生死を越えて永遠に及ぶ力を持つ神聖な神権の鍵を

私はあのかとき英国で、新婚夫婦にこのような証をした。愛する若い友人たち、これはきょうあなたがたに告げる証であり、世のすべての人に告げる証である。子供たちを愛する天の御父は、今も永遠にも幸福をもたらすものを子供たちのために願っておられる。人間関係のうちで最も深い夫婦と親子の関係以外に、まさる幸せはどこにも見いだせない。



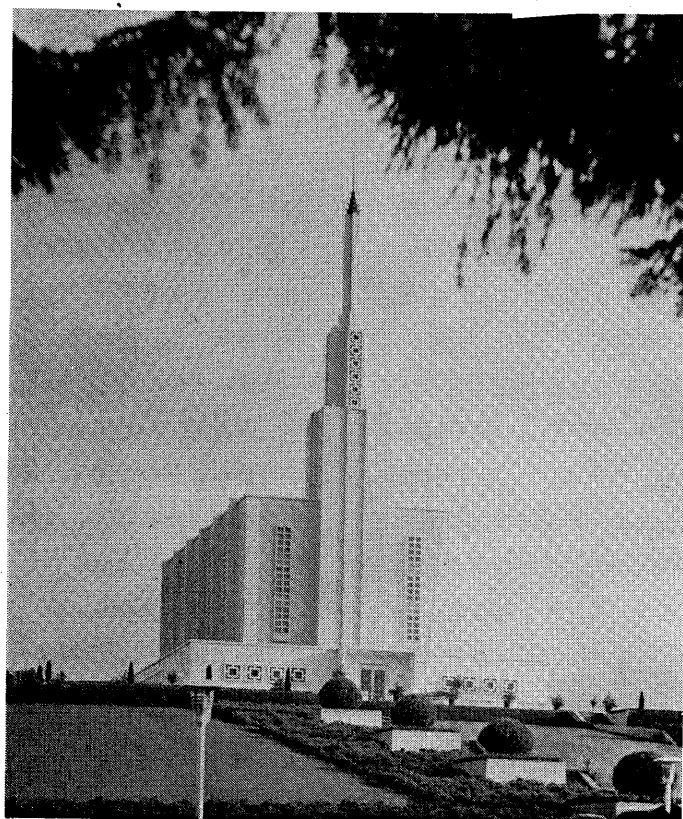
ワシントン神殿

受けたのです。これと同じ権能が、昔権能を持っていたペテロ、ヤコブ、ヨハネといった使徒たちによって、現在地上に回復されて存在しています。」そう話してから、今度の日曜日に神殿が奉獻されたあと、この宮居で結婚しにやってくる人たちのために、それと同じ聖なる神権の鍵が使われると言った。その人たちは死によってもわかれず時がたっても滅びない絆で結ばれるのである。

数日前、私はある大病の母親の臨終の枕辺に呼ばれた。ほどなく彼女は、夫と4人の子供を残して亡くなった。下の子は6歳の男児だった。痛ましく、つらい、深い悲しみがその場をおおった。しかし彼らの涙の奥底から、美しい確かな信仰が輝き出していた。今悲しい別離があると同じに、いつか必ずうれしい再会があるという信仰が。彼らの結婚は聖なる神権のもと、主の宮居で今も永世にも結び固められて出発し



ロンドン神殿



ニュージーランド神殿

たからである。

女性を真心から愛する男性、男性を真心から愛する女性であるならば、だれでも自分たちの間が永遠に続くことを望み、夢みるものである。しかし結婚は権能によって結ばれる契約である。もしそれが国の権能であれば、効力は死によって終りとなる。しかし国の権能に、死を乗り越えた御方から恵みの力が加えられて、夫婦がもしも約束にふさわしく生活するならば、その間柄は死後も続く。

私のはるかに若く、血気盛んな頃、こんな歌に合わせてダンスを踊ったものである。

愛はバラのようなものなの？

咲いて育って

そして枯れて

夏が過ぎると死んでしまう。

これはただの歌である。しかしこの質問は愛し合い、時を越えて永遠の将来を見つめた恋人たちが、幾世紀にもわたって抱いてきた疑問である。

その疑問に、私たちはいいえと答える。そして、啓示された主の計画のもとでは、愛と結婚は夏が過ぎれば枯れてしまうバラのようなではないことを、再度断言する。愛と結婚は、天の神が永遠であられるように、確かに永遠である。

しかし、何よりも尊いその賜は、自制や徳や神の戒めに対する従順といった代価を払ってのみ得られるのである。それはむずかしいかもしれないが、真理を理解すればそれだけの動機が生まれて、可能となる。

あるときブリガム・ヤングはこのように述べた。「我々の社会に、物事の本

来あるべき姿を理解したならば、正しく結婚するためにはたとえここから英国まで旅をせよと言われてもそれという青年はいない。また福音を愛し、福音の祝福を望みながら、別の方法で結婚するような女性は、我々の社会にはいない。』(Discourses of Brigham Young 「ブリガム・ヤング説教集」〔英文〕P.195)

大勢の人が、神殿結婚の祝福を受けに長い旅行をしている。ハワイ神殿への長旅のために、食を抜くまでした日本の末日聖徒たちを知っている。ロンドンでは、南アフリカから英国のサリにある神殿まで、身のまわりの物を何も持たずに1万キロの空の旅をしてきた人々に出合った。彼らの目には輝きがあり、顔には笑みがあり、口からは、その旅には、失ったすべてのものにまさる価値があるという証が聞かれた。

またニュージーランドでは、オーストラリアの西岸から来たという男性の証を聞いたことがある。彼は民事結婚をしたあとで妻子と共に教会に入り、あの広大な大陸を渡りタスマン海を越えてニュージーランドのオークランドに着き、美しいワイカタ渓谷の神殿に詣でたという。彼がこのようなことを言ったのを覚えている。「とても神殿に来る余裕はありませんでした。我家の財産といえば古い車と家具と食器だけで、わたしは家族に『神殿に行けそうにない』と言ったんです。でもそれから、かわいい妻や子供の顔を見つめて、言いました。『神殿に行かないわけにはいかない。主が父さんに力を与えて下さるなら、うんと働いてまた車

や家具や食器は買える。もし愛する君たちを手放したら、永遠にみじめなものな』と。」

私たちのいかに多くが先を見ないことか、あすのことを考えずにきょうだけ多見がちなことか。しかしあすという日は確実に来る。死も別離も確実に来る。正しく結婚し、正しい生活をしたならば、家族の絆は、必ずやってくる死や過ぎて行く時を越えて続くのである。そのことを知れば、平安がいかに心を慰めることか、またその確信はいかにうるわしいことか。人々は愛の歌を書き、歌う。望み、あこがれ、夢みる。しかし、時と死の力を越えた権能で結び固められなければ、それは皆ロマンチックなあこがれに過ぎない。

何年も前、ジョセフ・F・スミス大管長は壇上から語った。「主の家は秩序の家であって混乱の家ではない。…これはさらに神の律法と神の家の秩序に従わずに、今も永世にも結び合わされることは決してないという意味である。人々はそれを望み、この世においてはそれに到達するかも知れない。しかし、神の権能と御父、御子、聖霊のみ名により執行され、認められない限り、その結び付きは何の効力も有さない。」(「福音の教義」第2巻P.3)

まとめとして、ひとつの話をしよう。実話ではないが、中身は事実である。満月が輝き、バラは花開き、ふたりの間に聖なる愛が熟したとしよう。ジョニーはメリーに言った。「メリー、ぼくは君を愛している。ぼくの妻に、ぼくの子供たちの母親になってほしい。でも永遠にはいやだ。ある期間だけで、あとはさよならだ。」するとメリーは月

の光に涙を浮かべて言った。「ジョニー、あなたはすてきだわ。世界にたったひとりしかいない人よ。あなたを愛しています。夫に、わたしの子供たちの父親になって下さい。でもほんのしばらくだけ。それでさよならよ。」

おかしい話ではないだろうか。しかし、「新しくかつ永遠の誓約」によって永遠に結ばれる機会があるのに、死によって終わる結婚をする人たちは、この青年男女のプロポーズの言葉と実際は同じことを言っているのではないだろうか。

生命は永遠である。天の神は、永遠の愛と永遠の家族関係を実現された。

愛する若い友人たち、神はあなたがたを祝福して下さる。あなたがたが結婚を待ち望むとき、この世の全生涯の突り豊かな家族関係ばかりか、神の約束のもとで愛と貴重な交わりを確め合う、より良い状態を望むことができるように。

私は、この権能の源である主イエス・キリストの存在を証する。キリストの力、キリストの神権が私たちの間に存在し、聖なる宮居で行使されていることを証する。主が授けられたものをあなどってはならない。それにふさわしく生活し、それにあずかり、その聖なる神権の聖めの力で、あなたがたの間を結び固めなさい。この祝福を、私はあなたがたのためにへりくだり祈るものである。これらの証と、真理であることの証言を主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

召しに 応えて

十二使徒評議員会補助

ニール・A・マックスウェル



兄弟姉妹の皆さん、私はこの席で説教し教義を説くのではなく私の持つ証と感謝の気持ちを申し述べたいと思う。

まず最初に、私はキンボール大管長を通して与えられた主の召しに感謝したい。

また、皆さんが私のこれまでの行動を弁護したり、あるいは正当化したりすることではなくして、私の現在あるがままを受け入れ、今後に託して私を支持して下さいたことに感謝の意を表したいと思う。

私はまた、共に福音と教会が真実であることを教え示してくれた謙遜な両親と、すばらしい妻コリーンに感謝している。彼女はどのようなことにでも適応できる人物で、私たちの家庭を天国のようにしてくれている。

ドイツで伝道中の息子と3人の娘たち、そして娘婿にも感謝したい。私は彼らの父親としてこの務めを立派に果たせるようにと心から願っている。子供たちが双手をあげて私を支持してくれたことは、これから続く私の日々に

おいて2倍の価値となって返ってくるに違いない。

また、力強い予言者としての模範を示しておられるだけでなく、キンボール姉妹と共に絶えず「清く汚れない信心」(ヤコブ1:27)を実践しておられるキンボール大管長の姿に、深く心を動かされる思いがする。大管長は実に謙遜で慎み深く、控え目で飾り気のない、偉大なお方である。彼は、ただ盲従するのではなく自分自身の生活の中から確信を見いだすように望んでおられる。

私は、ハロルド・B・リー大管長の思いやりある指導にも感謝している。

また、タナー、ロムニーのふたりの副管長とベンソン会長、ならびに私が仕えようとしている十二使徒の兄弟たちに感謝の気持ちを述べたいと思う。彼らの人生をかいま見るにつけ、一人一人が主の目的の下にその職にふさわしくなるよう備えられてきたことがわかる。なぜなら神は万事を承知しておられるからである。

次に私は、不平も言わず家族を残し、私たちに教えを施すために熱心に旅を続ける教会幹部の皆さんに感謝したいと思う。この事実は、リチャード・L・エバンズ長老が語った名言ともウィットとも言える言葉の中に、よく表われている。「あなたは飛行場に行く途中でホームシックにかかったことがありますか。」

また、ユタ州のトレモンソン、オグデン、ならびにネバタ州のレノで私を

助けて下さった教会員の方々、そして親切な十二使徒会地区代表の兄弟たち、特に主が他の国々で立てられた地区代表の兄弟たちに、心からのお礼を申し上げたい。

また、世界の50カ国で教会教育制度に献身的に携わっておられる30万にのぼる同僚や学生たちにも感謝している。

贖いの中に、自分がこれまで犯してきた数え切れないほどの罪が含まれているということを考えると、イエス・キリストへの感謝の気持は尽きることが知らない。またイエスが与えて下さった証に感謝する。私は35カ国で喜びをもって証を述べることができた。人は、イエス・キリストの福音というレンズを通して人生と人々を見るとき、はじめて永遠を見ることができるのである。

私は、従順の度合に応じて祝福を与えて下さる天父に心から感謝している。しかし、私の従順の度合と天父の祝福を比較してみると、神はなんと寛大なお方であろうか？

私は、日の光栄の標準は奉仕によって測られるのであって、地位や身分で決まるのではない、すなわち、それは私たちがどれだけ多くタレントを用いるかによって測られるのであって、タレントの数によって左右されるものではない、ということを知っている。また教会員であるということは私たちに何もしなくてよいというような安心感を約束するものではなく、常に積極的に働く機会を与えるものである。

最後に、私はある賢人の書いた次の言葉が真実であることを証したいと思う。「もしあなたが何をおいてもまず第一に神の王国を選ばなかったならば、最後にあなたの所にやってくるのはあなたが最初に選びとったものと何の変わりもないであろう。」神が、その王国を選んだ私たちすべてを祝福し、さらに私たちが王国を発展させることができるように。イエス・キリストのみ名により祈る次第である。アーメン

1974年4月7日日曜日午後の説教

私の家族の改宗について

塩 隆 義

(仙台支部)



塩 兄 弟 姉 妹

私の妻は台湾で生れ、育ち、其処で私と結婚しました。台湾は物資の豊富な所でしたから彼の地に於ける生活は何の不自由もなく過し、終戦当時の状況も日本の本土の様に極度の物資不足に見舞われるようなことはなかったのです。けれども敗戦は私たちの生活に大きな変化をもたらしました。敗戦の結果、私たち夫婦は当時11歳の長女を頭に4人の子供と共に、僅かな身廻り品を携えて、昭和21年4月2日仙台の私の生家に引き揚げてきました。

私達は帰国に当り物心両面共に乏しくなっていた敗戦後の日本での生活は相当に覚悟して来たとはいえ聞きしに勝る深刻さで、乏しい食糧状態が続き、帰国以来の妻の生活は家族8人の主食の調達に追われ東奔西走の毎日でした。しかも子供の成長は早く大勢の家族の食欲を満たすには私一人の薄給ではおぼつかなく、止むを得ず衣類とお米を交換する筈生活を余儀なくされました。こんな生計も底をつくようになった頃、父は腸捻転で苦しみ出しましたので岩本外科病院に入院させました。ほんとうに弱り目に祟り目の出来事でした。けれどもこの様な不幸が、我が家に福音がもたらされる糸口になるうとは誰が予知できましたでしょうか。父は元々非常に頑健で病氣一つしたこともなかったのに、手術後意外に早く全快して退院しました。父の入院中岩本病院では駅の近くに別に立派な病院を新築中でしたが父が退院した翌年の春にそれが完成し、同時に多くの人手をふやすこととなり、妻に庶務の仕事を手伝って貰えまいかという依頼がありました。まだ就学前の子供がふたりおりましたが苦しい

家計の足しにしようと昭和26年5月からその病院で働くことになりました。勤めて間もない夏の或る日のこと、高校生の姉妹がふたり狂人に小指を噛みつかれたという、14歳の戦災孤児を連れて来ました。見れば左手は血みどろです。「どうぞこの児のけがを治療してやって下さい。治療費はあとで宣教師が払いに来ますから」と言っでその児を置いて帰りました。取りあえず治療をしてやったのですが、その児はその後4日程通って来ましたが、まだ治り切らないうちに来なくなってしまいました。それから2週間ほど過ぎた後、ふたりの若い外人が来て、「先日治療をお願いした児の治療費を支払いますからどうぞ受取りを書いて下さい。宛名はマツジツセイトイエス・キリスト教会です。私は宣教師です。マツジツのマツは末の日の末で、セイトのセイは聖人の聖です。トと言うのは学校の生徒の徒です」とまことに流暢な日本語で話したので、妻はまずその流暢さに驚きましたが、上手に漢字まで書いたので、すっかり感心してしまい、またこの外人達と戦災孤児と一体どのような関係があるか不思議に思われたので、そのわけを尋ねますと、街頭伝道で話している最中に、その孤児が傍にいた狂人をからかったので、狂人が怒り、いきなりその児の指に噛みついたとのことでした。「伝道中に集まって話を聞いてくれていた人だから私たちがその責任をとります」という立派な態度に妻はすっかり感動して、それから色々質問している中に今まであった何れの教会にも属さない神様の真の教会であるということを知ったのでした。妻は精神的にも肉体的にも非常に疲れていて、何かの安らぎを求めている時でもあったので、この教会の神様の教えを聞いて見たくなくて家庭集会を約束したのがこの教会に導かれるきっかけでありました。

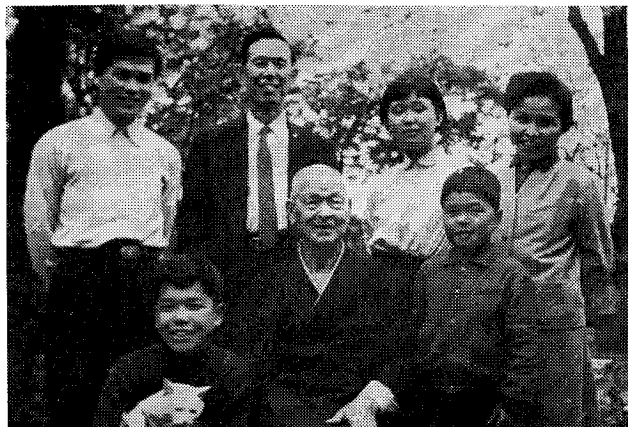
かくして毎週3度ずつ家庭集会を受けた後、確かな証を得て昭和26年12月25日のクリスマスの朝にバプテスマを受けたのであります。妻はその後、まず身近かな者から福音に導こうと決心し、当時高校2年生の長女順子と中学3年生の次男英雄のふたりを教会に誘い、このふたりは翌昭和27年相前後してバプテスマを受けました。けれども妻は決してこれのみに満足せず、家族全員の改宗を心から願っていたのでした。

さて、私は幼少の頃から熱心な天理教信者であった母に育てられたので、私の人生観の中には多分に天理教的な考えがありました。しかし昭和11年8月、やがて4歳の誕生日を迎えようとしていた長男を急病で亡くした時には悲しさに堪えられず、何とかして心の慰めを得ようといろいろな宗教をかじりましたが、これと言って私の心の痛手をいやしてくれる物を見出すことはできませんでした。

妻は長女と次男を教会に導いた後、今度は私に福音を聞かせようと或日宣教師のノートン長老とその同僚の池上長老を家に連れて来

ました。しかしその時の私は初めから彼らの話を聴く意志がなかったもので、話半ばにして、長老たちに議論をしかけ、日本語がまだよく使えないノートン長老は目をパチクリさせて困っていましたし、池上長老はかなり腹を立てられた様子でした。この有様を傍に座って見ていた妻は、到底私を改宗させることは不可能と諦め、悲しみにくれないながら長老をお帰ししたそうです。その後しばらく経ってノートン長老は任期が満ちてアメリカに帰国されることになりました。妻は駅まで見送りに行き、発車間際にもう一度握手にと行った時、彼は悲しさをこらえている妻に向かって、「私はアメリカに帰ってから、朝、昼、夜と毎日あなたの御主人のためにお祈りすることを約束します」とはっきり語られたそうです。妻は声も出ず、ただ涙ばかりで、「お願いします」と心の中で彼の御好意に感謝しつつ固く手を握ったとずっと後になってから話してくれました。

それから幾年か過ぎた頃のことですが、余りに熱心に通いつめる妻の姿を見て、嘗ては議論をしかけたこの教会の教えにも何か惹き



1957年6月82才でバプテスマを受けた長七兄弟と塩御家族

つけられる素晴らしいものがあるに違いない、ひとつ謙虚になって聴いて見たいという気持になり、妻を通して宣教師と家庭集会の約束をしたのであります。それ以来2年余、毎週木曜日の夜、教会を訪問して家庭集会を受けているうちに、次第に理解の目が開け、全智全能なる神の知恵とその能力と愛の偉大さがひしひしと感じられようやく霊性に目覚めることができたわけです。この様に神の存在を自分の裡に認め、心から納得することができましたので、昭和31年9月9日、私は三男隆彦（12歳）、四男文彦（9歳）と一緒に、次男の英雄から広瀬川でバプテスマを受けることができたのであります。

私はバプテスマを受けて間もなく50歳の誕生日を迎えましたが、私がバプテスマを受ける直前に、ノートン長老から妻宛に來た手紙がありました。それには「この手紙があなたの所に着く頃には、あなたの御主人はバプテスマを受ける決心をしている筈です」と書いてあり、彼は妻との約束通り、それ以来何年間も熱心に心から祈り

続けていて下さったことを私は初めて知ったのです。彼は妻からは夫が家庭集会を受け始めて2ヵ月になることを知らせた感謝の手紙を受けたのみで、その後の状況については何の通知も受けてはいなかったのですが、彼の靈感によって、私がバプテスマを受ける決心をしたことがわかったのではないかと思うと「みたま」の導きの偉大さに驚かすにはおられません。このほかに私のバプテスマに関連してもうひとつの不思議な出来事がありました。それは私がバプテスマを受けることに決まっていた日の数日前のことでした。母は突然「郁子（私の妹で仙台市に住んでおります。）の処で世話になりたい」と言い出したことです。母は家付の娘ですから、生れ落ちて以来この家を離れたことが無かったのです。その母が家を出たいと言いつ出すなどとは、夢にも考えられない晴天の霹靂の様な驚きでした。然しよく考えて見ますと、私がバプテスマを受ける決心をするに当っては、信仰上のことで母との間に軋轢が起りはしないかという一抹の不安はありました。けれどもまた一方に、その時はその時点で、神様は必ず良い道を開いて下さるに違いないという確信も湧いてまいりました。この様なわけでしたから、私がバプテスマを受ける決心をしたことはまだ妻にさえも話していなかったので母は勿論知る筈はなかったのですが、母は何かを感じていたに違はなく、妹の所に行きたいという決心は非常に固く、遂に私がバプテスマを受ける日の3日前に妹の家に引き移って行ったのであります。父は別段これといった信仰を持っていなかったもので、母の去った後は案じていた家庭内に於ける宗教上の衝突のおそれは解消してしまいました。この様にして一家6名がモルモン会の会員になりましたので朝夕何の気兼ねもなく家族の祈りを捧げるようになりました。私たち3人がバプテスマを受けてから8ヵ月後、今度は頑固一徹の老父がバプテスマを受けました。それは昭和32年5月26日のことですが、この経緯は昭和25年腸捻転で岩本病院に入院した時に始まり、7カ年の長年月に亘っての一連の出来事なので、限られた紙面では書き尽せませんが、直接の動機は、父が灌油の儀式の偉大な効力に驚嘆し心から神の存在を知ったからであります。直接に彼の頭に手を按いて祈ってくれた若い外人宣教師は、この世のものならぬ神からの人であると信じたからに他ならないと思われます。神様は我が家に福音をもたらす糸口となってくれた父を、その儘に放っておくことなく、或方法をもって心底から神の存在を知らしめ、老齢にも拘わらず喜んでバプテスマを受けるように導いて下さった神様の奇しき御業には、ただ驚き入るばかりです。ほんとに神様は不思議な業をなさいます。私の改宗については、絶望して祈る元気もなかったという妻の悲しみを憐れみ下さって、神様は心のかたくなな私をお召しになり、さらに母の心をも和らげて下さったのです。

母は心の清らかな人であったからでしょうか、様々な夢で自分のまわりの人々の出来事を予知できる人でした。この様な母でしたから神様は遂に彼女に何かの夢を見せたのではないのでしょうか。妹宅に滞在していた時、或る真夜中、突然起きて蚊帳から這い出して来て、読書中の妹の夫に申しました。「私は今まで自分の正しいと思

うことを人に押しつけようとする気持があったが、これは悪かった」と。彼はそれは何の意味か全然わからず、その時次男が入院中であつたし、祖母に早く帰宅してほしいと言っていたことを彼女が聞いたので、急に我が家に帰りたくなつたのではないのでしょうか？と妻に話を持ちかけて来ました。妻と私とは母の気持をすぐ理解できました。その思いは当っていました。母は私を呼んで申しました。「隆義、お前の言うヤソ教が正しいと思うならば、どうか飽きることなく最後までやり通しなさい」と。母は異宗教を信じる私たちを嫌って娘宅へ行き、残りの人生を預けた積りでしたが、逆に神様は妻の涙を読まれて母に何かの方法で導きをお与え下さったのだと信じます。妻は神の愛と力を信じて少しも疑わず、毎日を、何年も祈り続け、一心に縋り、彼女なりの努力を惜しまなかったのです。その喜びは如何ばかりであつたでしょう。私も、心の底から晴々となりました。

その後間もなく母は3年振りで我が家へ戻って来てくれました。それから亡くなるまでの8カ月間、母は芯から私たちと打ちとけて妻に対してはすべてを安心して任せてくれ、何をしてあげてもほんとに嬉しそうに心から感謝してくれました。

この様に我が家の改宗は妻に始まりましたが、この妻の改宗の蔭には次女の大きな助けがあつたことを忘れることはできません。彼女は妻に代って体の弱かった母と頑固な父を、日曜日やその他の日に一切引き受けて、快く教会に出してくれました。けれども彼女は改宗しないまま縁付いてしまいました。それ故に次女一家の改宗は妻のみならず私たち家族一同の念願です。私たちがもっともっと立派なモルモンとなるならば、きっと次女一家の改宗の喜びの日を迎えることができるものと信じております。

過ぎ去ってみると、その当時は苦勞と思ひ耐えて来たことも、実は神様の大きな御恵みであつたこと、我が家の昇栄のために必要な神の祝福であつたことを心から信じ確かな証としてここにはっきりと申し上げることができます。

神のみ手に導かれて

松 本 潔

(国立支部)

この証をイエスキリストのみ名によっていました。アーメン。

多くの人々がそうであつたように、私もまた神のみ手に導かれてこの真の教会にいざなわれて来た者であることを証いたします。それは今から8年前、私の41歳の誕生日をすぎた夏の午後のことでした。

会社の仕事で道を急いでいた私の前に突然ふたりの若い外人が現われ「ちょっとお話をしてもよろしいでしょうか？」と呼び止められました。私は急いでいたのでその時は話しをすることができず、後日私の事務所においで下さいと名刺を渡して別れました。何か心を引かれるものを感じ、別かれてからも、彼らの名前も、何者なのかも聞かずに来たことが気がかりになっていました。それから1週間後に、私の事務所に彼らが訪れて来たとき、私は何か失った物を見つけ出したときのような喜びを感じました。私の渡した1枚の名刺が私を神のもとに導いてくれるきっかけになったことに何か不思議な力を感じております。

当時私は長年勤めた職場を変わり関係会社に出向を命ぜられ新しい環境になれるために努力している時でした。社会は混沌として景気は悪く、決して順調ではありませんでした。私も今までの人生をふり返り、余りにも無価値なことに力を注ぎこんできた自分を反省し、人生にとって本当に価値あることとは、一体どんなことなのかと青い鳥を探し求めていたときでした。子供の頃から母は熱心な天理教の信者であり、私も物心ついた頃から母に連れられて教会に参り、家でもいつもお祈りをさせられて育てられましたので、宗教心は心の奥深くあつたようです。災難にあうといつも大難は小難、小難は無難に過ごさせ給えと念ずるような心があり、キリスト教や仏教にも関心を持って聖書や仏典に親しんだこともありました。そしてちょうどその頃には生活環境も変わり時間的なゆとりもできましたので、日本の古い神道(かんながらのみち)を学んでいる最中でした。

諸々の宗教が現世利益を中心に人の救いを説いている中で、ただひとつ古い日本の神の道は祭政一致、祖先を崇拝し、親神様のもとに立ち帰ることを唯一の目的として教え、人が何のためにこの世に生まれて来たのか、またこの世で清い生活をして、神々のもとに立ち帰ることのできるよう親が子に神の道を教えてきたと言う古い日本の宗教にとっても心をひかれていました。神社を中心に氏子が祖先を祭り地域社会が族長によって治められる族長政治の形態は、現在では形ばかりでその実がありませんが、その精神は日本人の心の奥底に目に見えぬ血統によって植えつけられ、何か大きな国難が来るとどこからともなく目覚めてくる復古精神によって保存されてきました。古事記、日本書紀によって知ることのできる古い日本の歴史と、それ以前の神代の伝承は私の心を強くとらえて離しませんでした。

しかし、現代では天の下に清い人がいなくなったので神代の伝承は理解されないが、身心を清くして汚れない生活をしておれば、必ず天から神々の使いが来て、人の世のこと、神の世界のことにつ

いて知らせてくれるとの伝承を信ずる人々がおられ、私もそれらの人々から神道について学んでおりました。

このようなとき、私はふたりの若い宣教師に会い、彼らからキリスト教について、今まで私の理解していたキリスト教とはとても異なった話を聞き本当に驚きました。モルモン経と教義と聖約を借りて読んでいるとき、私はこれは日本の古い神代の伝承と全く同じものであると思いました。祭政一致、族長政治、神権政体、家長の権能、家督権、家庭の大切さ、親子の関係、祖先の崇拜、系図の探求、これらはみな古来日本で最も大切にされたものばかりです。私は夢中になって彼らに古い日本の伝承を語り、彼らは私にモルモンの教義を教えました。2カ月ほどの間に教義に関する疑問は余りなくなりましたが、本当にこのような教えを信じて毎日の生活をしている人々がいると言うことがなかなか信じられませんでした。しかし私も人の親として、自分の子供を正しく導く責任があり、自分自身を正しくするには人の力ではなく、神の力によって悔い改め、キリス



松本御家族

トの贖いによって罪の赦しを受け、神の子として正しい神権の導きによって自身を清める以外に方法のないことを知りました。まことに天の下の清い人々となるには、多くの試練と困難がありますが、神は求める者にはすべて正しい方法で道を備えておられ、人の考えでは困難に思えることでも、神に頼れば全く困難ではなくなりました。若いふたりの宣教師の献身的な愛と助けにより、また教会の多くの兄弟姉妹たちの助けにより、私のように汚れた者でも、41年の迷いの世界から脱して、神の王国の戸を開けてもらうことができました。

バプテスマの水は、私の41年の生涯を全く変えてしまいました。人の親としての責任を自覚し、神の子としての自尊心を取り戻した自分の前には洋々たる前途が開けて参りました。神は人をかたより見ることはされません、どんな人でも心から悔い改めて真理を求めらば、喜んで力を貸して下さいます。今までの酒びりの生活から一変し、この世の不公平をうらむ気持ちから一転し、すべては神

の摂理になかったプログラムであり、すべてのものには時があり、すべてのことは、公平に処理されていることが理解されて参りました。現世利益のみを見ていてはわからないことも、永遠という時をもって見れば万事都合になるものだということがわかってきました。人は皆自分の持てる自由意志に従って、善をなすも、悪をなすも自由であり、その結果を自分で受けることを知るならば、全くこの世の中は公平であると言えます。

私自身の改宗はこのようにして始まりました。それから8年、決して平坦な道ばかりではありませんでした。神は私の前に家族の改宗と先祖の救いという大きな責任を与えられました。自分自身を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。私はまず妻と年齢に達した3人の子供を教会に導くために全力を尽くしましたが、強制による説得は力がありませんでした。ただただ偽らざる愛と、信仰と希望によって自分自身を正しく保ち、神よりの助けと、神権の力と強い証が次第に家族をこの道に導いたものと思います。

1年半後に妻と3人の子供がバプテスマを受けることが出来ました。2年後には74歳になった母が私の変身ぶりを見て遂にバプテスマを受けました。3年目には妻と共にハワイ神殿に入り永遠の結び固めをすることができました。

4年目にはソルトレーク神殿訪問に参加することができ、二男を結び固めることができました。このようにして次第に家族の中に大きな愛と一致が広がり、この間に聖約の子をふたりもさずかり、6人の子供を持てる親になりました。神様は誠に不思議なことをなさいます。力の無い私たちに力を与え、金の無い私たちに、必要に応じて金を与え、7年目には遂に、家族全員でハワイ神殿を訪問することができたのです。そして全家族の結び固めを行ない、また先祖のための儀式も可能な限り行ないました。今年はまだ長男が宣教師として伝道に召され、毎日楽しく伝道に励んでいると毎週手紙をくれております。毎週家庭の夕べで全家族が集まり、神様から与えられた一時を、愛と一致の心で過ごせる楽しみは何と感謝してよいかわからない位の喜びです。子を持つ親として、その子に行く道を教え、子がその道を正しく歩むのを見るとき喜びほど大きなものではありません。神のみ名は誉むべきかな、人にその道を教え、その帰るところを用意なさっておられます。

私はこの教会に導かれてまだ8年目ですが、すでにこのように素晴らしい数々の祝福を受けております。8年前のあの夏の午後、1枚の名刺が宣教師の手に渡り、不思議な方法で私たちが神の家族の一員として迎えて下さったことを心から感謝しております。

これからもまた数多くの方々が神のみ手に導かれて、神の王国に來られることと思います。私たちが受けました多くの愛と恵みに感謝すると共に、私たちがまたより多くの愛と奉仕をすべての隣人に尽くしたいと思っております。これらのことをすべて主イエス・キリストのみ名において証いたします。アーメン。

